

第五章 サウディアラビア王国の国民アイデンティティの成立：過程と特性

中村 覚

1. 問題設定と先行研究

(1) 先行研究

サウディアラビア王国における国民アイデンティティを論ずるうえでの第一の論点は、はたしてサウディアラビアでは、部族はいまだに支配階層の中で強力な影響力を維持したり、人々の間で第一のアイデンティティとなっているのだろうか、それとも「部族解体」がなされたのか、という問題である。また第二の論点としては、サウディアラビア国民としてのアイデンティティとムスリムとしてのアイデンティティの関係がいかように位置づけられるのか、という問題である。

欧米の研究者による先行研究では、サウディアラビア王国の国民国家形成に関して、サウディ王政への低い評価と相俟って、ネガティブな見解が主流となってきた。サウディアラビアでは部族的政治が支配的であると見做した研究には、[Halliday 1974=1982], [Lackner1978=1981], [Hudson 1977], [Kostiner1991] があげられる [Halliday 1974=1982:20-29, 32, 50, 55], [Lackner1978=1981:101], [Hudson 1977:169-182], [Kostiner1991] [Abir 1987] は、サウディアラビアの政治は、王族、ウラマー、部族長による寡頭政治である、という [Abir 1987:155] [富塚1993] も、サウディアラビアの政治は、王族、ウラマー、部族長から構成される「鉄の三角形」が意思決定の中核にあると議論した。

サウディアラビアでは部族政治や地域主義が優位であるという立場に立つ研究は、現地で調査研究を行わずに欧米の新聞、雑誌で報道された記事を主要な資料としている。またそれらの研究の理論的背景については、LacknerやHallidayはマルキスト的な視点に立つ論者であるが、Hudsonは、60～70年代に隆盛を極めた、政治学における構造機能主義的近代化論の影響を大きく受けて議論を展開している。マルキストや構造機能主義的な近代化論は、「近代と伝統」を対置し、近代化によって伝統が置き換えられていく、という前提に基づいている。特に構造機能主義的政治論は、「民主主義 = 近代」、「非民主主義 = 前近代」という二項図式にも依存している。これらの諸前提のため、上述の諸研究は、20世紀に成立したサウディアラビア王政は前近代の伝統に基づくアナクロな政治であるという先入観を抱く原因となってしまっている、と考えられる。

欧米とは異なる条件におかれ、独特の歴史的発展過程をもつサウディアラビアに関して議論する場合には、当然ながら、オリエント = 伝統 = 非民主主義 = 前近代、という既

成概念を一旦取り払ったうえで、固有の環境の制約の中で生じた社会的発展を実証的に理解することが求められるはずである。

サウディアラビアの政治が部族政治である、という見解は、サウディアラビアで行われた文化人類学的研究の影響も無視できない。[Cole1975 = 1982] や [Lancaster1981] は、サウディアラビアの遊牧部族民が、近代化や国家官僚化の時代的趨勢の中で、サウディアラビア国民となることを論ずる一方で、所属する部族への忠誠が国家への忠誠を上回ることを示唆する [Cole1975 = 1982:135], [Lancaster 1981:162]

だが両者の研究は、発展から遅れ気味の辺境に位置する遊牧部族を調査対象として選択しており、時期的にも1960～70年代になされた調査であるため、石油ブームや70年代以後の都市化を十分に射程には捉えていない。

また筆者がサウディアラビアに滞在中に散見したところでは、一般的に現在の都市的サウディ人は、他の部族出身者と社会的関係を構築しようとする際に、互いの心象を悪くしないようにという配慮を働かせて、自分の部族の優越性を誇示するような態度は慎むようになっている。そこでサウディ人は、むしろ外国人に対しては、そのような配慮が必要ないため、自らの部族アイデンティティを無心に誇示することができる。ましてや、他部族民との混合が進まず、一つの部族の部族民しか生活していないような辺境地域を調査すれば、当然に部族アイデンティティが強調される調査結果がもたらされるだろう。

近年人類学では、「部族」に関する研究が蓄積され、部族社会の多様性が議論されるとともに、部族の定義づけにおける困難が指摘されている。明確な定義を与えることが難しい実体をもつにも関わらず、部族概念が繰り返し使用されてきた背景としては、西洋植民地主義的な偏見が強く影響した点が指摘されている。すなわち、植民地経営に乗りだし始めた列強は、現地の人々を原始的な「部族民」と見做し、発展から取り残された人々であると位置づけて、自らの植民地経営を正当化したのである。

ただし部族概念の成立における西欧植民地的な偏見の作用の程度に関しては、植民地勢力によって部族の形成が進んだような地域と、植民地化以前からqabilah ('ashirah) 概念が存在している中東の場合などでは、異なるケースである可能性を念頭におくべきではないか、という点も指摘しておきたい。部族tribeとqabilah ('ashirah) が同一の概念であると見做すことはできないにしても、tribeとqabilah ('ashirah) は訳語として使用される頻度が最も高い概念である。アラブではqabilah ('ashirah) 概念は植民地化以前から存在しており、このことは「部族」的な社会構造が西欧による植民地化以前から存在して

いたことを示していると考えられるだろう。

そこでサウディアラビアにおける部族アイデンティティの問題について議論するためには、部族概念について留意しつつ、できるだけ適確で具体的なデータに基づく再検討が求められている、といえる。

現地での調査から得られたデータを情報源とするためには、そのようなデータを多用して上梓された米国未出版博士論文を参照する必要がある。ただし、西欧における古典的な国民国家論では、経済統合、国民形成、国家機構の3つの成立が、国民国家の成立の契機と理解されてきたが、サウディアラビアの国民国家の発展に肯定的な研究では、「国民アイデンティティの形成」問題よりも、経済の統合的機能や行政機構の成立の問題に関する研究が主なテーマとされてきた。サウディアラビア王国の行政機構の成立過程を建国の1930年頃から、1960～70年代まで跡付けながら、国家の成立を議論した研究には、[El-Erris 1965], [Shaker 1972] がある。莫大な石油収入の国内での分配に関して焦点をあてる、レント国家的特質に関して議論したものには、[Bedawi 1985], [Tabeileh 1991], [Krimly 1993] があげられる。だがそれらの研究では、サウディアラビアの「国民アイデンティティの成立」の問題に関する議論は、主たる論点とはされていない。

サウディアラビアでは部族社会が解体された、という立場に立つ研究には、[Fabietti1973], [El-Farra1973], [Hadda1981], [Hamad 1985] があげられる。それらの研究は、遊牧部族民について研究を展開し、サウディアラビアでは「部族アイデンティティは存在し続けているが、もはや中央政府への忠誠心を超えない」という見方に立つ。またサウディアラビア国民としてのアイデンティティが確固としたものとして存在する、という立場に立つものには、[Piscatori 1981=1985], [Toufik 1985], [Sharideh 1999] があげられる。これらの研究は、遊牧部族の定住化や、サウディアラビア社会の近代の変容を主要なテーマとして取り上げているが、やはり、サウディアラビア国民アイデンティティの内実はいかなるものか、という点については議論を展開していない。

以上、サウディアラビア国民アイデンティティと部族アイデンティティの関係に関する先行研究を主に概観してきたが、これら以外に、サウディ人としてのアイデンティティは、ムスリムとしてのアイデンティティと両立しているのか、あるいは相反する事態が生じてはいないのか、という問題がある。

一般的にサウディ人は、自らの複合アイデンティティに関して、ムスリムとしてのアイデンティティが最も大切であり、次にサウディ人としてのアイデンティティが重要である、と述べることが多い。

先行研究では、[中田1994]が、サウディアラビアの二重アイデンティティについて指摘した。中田が指摘するサウディアラビアの二重アイデンティティとは、イスラーム内部のワッハーブ主義としてのアイデンティティ及び非ムスリムに対するムスリム・アイデンティティのことである。[Piscatori 1981=1985]は、イスラーム・イデオロギーが、部族的分裂状況を統合し、さらに1950～60年代のアラブ民族主義の脅威に対抗する役割を果たした点を議論した。

「ムスリム・アイデンティティ」の内実が、サウディアラビアを越える広がりをもつ広大なイスラーム地域を意味するウンマをその源泉とするのか、サウディアラビアという国家を源泉とするのか、という問題については、ほとんど議論は蓄積されていない状況である。

(2) 本章の枠組み

本章では、部族アイデンティティの位置づけの変容、及びサウディアラビア国民アイデンティティとムスリム・アイデンティティの関係に関して議論を試みる。議論は、時系列的に進められる。第二節では建国期、第三節では建国から1960年代まで、第四節ではオイルブーム以降、第五節では湾岸戦争以後を議論する。

部族アイデンティティに関しては、部族集団と国家の関係の変化によって生じた、軍事的政治集団としての部族集団の地位の低下について検討される。また都市化した社会に現れつつある、核家族や親族ネットワークについて提示される。

サウディアラビア・アイデンティティに関しては、以下のような議論が展開される。まずサウディアラビアにおける社会階層構造に関する検討を通じて、都市民を基盤としているワッハーブ主義とサウード家の複合による支配が、サウディアラビア・アイデンティティ形成のための諸装置を支配していることが提示される。次に石油ブーム以後進められたイスラーム的伝統の創造の結果、サウディアラビア・アイデンティティは、「イスラーム、そして王と祖国」という複合アイデンティティとして覚醒されたことが示される。また湾岸戦争の衝撃によって明らかになった、ムスリム・アイデンティティとサウディアラビア国民アイデンティティの相剋の発生要因として、サウディアラビアの教科書の内容、ワッハーブ主義的な文化的特性、またサウディアラビアにおける政治的動員力の弱さについて指摘する。最後に第六節で、結論をみちびくことになる。

本章が依拠するデータは、筆者が1994年4月から1997年1月まで専門調査員として在リヤード日本国大使館に勤務した期間に行った調査ノートを用いた他、できるだけ現地で行われた調査に基づくデータを利用するようにした。本章で検討した研究の主要なデ

ータには、データの限界性が確認されたものや、特にサウディアラビアの階層構造の把握などにおいて今後アップデートの余地を残すものもあるが、本章の分析枠組みや現段階で筆者にとって整理可能であったデータの提示に一定の評価が認められるなら、本章の目的は最低限度、達せられると考えている。

2. 建国までの階層形成

(1) 政治的軍事的集団としての部族集団の解体

1930年代後半のナジュドには、遊牧民、農耕民、職人、商人、長距離交易の商人という職業分化が存在していた [Alturki&Cole 1989:23]、サウディアラビアの建国過程においてサ우드家が支配基盤としたのはどの社会階層だったのか、という問題に関しては、3つの見解が存在する。つまり 遊牧民 (bedouins, nomads)、 定着民 (townsmen, settlers)、 遊牧民と定着民、である。

の、遊牧民という見解をとるLacknerは、サ우드家の政治的手法が、遊牧民的な部族政治の価値観に立脚している、と述べている [Lackner 1978=1981:210-211] の、サ우드家の支配基盤は定着民であるという説は、[Niblock 1981:77-95] の説であるが、イフワーン運動へ低い評価を与えている点が特色である。 の、遊牧民と定着民の両方を基盤としたという説は [Helms 1981:76, 105] の立場である。だが実は、「遊牧民と定着民」という解釈自体が、曖昧さを含んでいる。

サウディアラビアの政治が部族政治であるという立場をとる、前節であげた先行研究のほとんどは、部族集団が、いかなる政治的形態や生産様式に立脚して存在してきたのか、十分に検証せずに、部族について語っている [Halliday 1974] , [Hudson 1977] , [Kostiner 1991]

[Katakura 1977:28-31] や [Oleander Press 1986] に基づいて、アラビア半島の社会的分類をもう一度整理すると、住民は、大きく分けて、badwとhadariに分かれている。badwは、しばしば「遊牧民」と訳されるが、本来は「田舎や砂漠の民」という意味である。またhadariは、しばしば「定着民」と訳されてきたが、本来の意味は「都市民」である。hadariは「定着民」でもあるが、badwは遊牧民と決めつけることはできない存在で、badwの中には、遊牧民 (nomad)、半遊牧民 (semi-nomad)、村やオアシスに住む定着民 (settled) の3種類がいた。

そこで本章では、hadariを「都市民」、badwを「田舎や砂漠の民」を意味するものとして「ベドウィン」とする。そして「ベドウィン」には、「遊牧民nomadic badw」、「半遊牧

民semi-nomadic badw」,「定着ベドウィンsettled badw」が含まれると分類する(ただし、以下の分析上の支障がないと考えられるので、本章では、遊牧民と半遊牧民を合わせて「遊牧民」と呼びたい)。「定着民」と呼ぶ場合には、「都市民」と「定着ベドウィン」を指すことにする。

ナジュドの社会構造に関して確認しておくべき点は、ほとんどの定着ベドウィンや遊牧民は、部族社会構造を有していたが、都市民は、部族的政治集団(分節政治システム)を構成していなかったことである。従って以下の記述では文脈の必要に応じて、遊牧民に関しては「遊牧部族民」と言及する。ナジュドの都市の実態に関しては明らかにされるべきことが多く残されているが、カシミールのウナイザに関する研究によれば、同一の親族的起源を持つ住民が集合する街区構成にはならず、様々な出自の住民が混合しており、自由な市政(free township)が行われていたという[Alturki&Cole1989:20, 22]。ナジュドの都市支配層は、部族集団というよりも、「名望家層」と呼ばれるべき政治集団に類似していたのではないかと考えられる。すなわち、ワッハーブ主義・サウード家の複合支配が、ベドウィンの社会的地位を低下させたということは、部族的価値観が次第に後退する過程におかれた、ということの意味している。

筆者は現在まで、サウディアラビアの建国過程に関する研究を進めており、今後結論を発表していく仮説段階にあるのだが、当座の仮説を述べるならば、以下のようになる。サウード家は、都市民とベドウィンの双方の力を結合することにより建国という偉業を達成したといえるが、果たして都市民とベドウィンのどちらがより重要な支配基盤であったのかという問題に関して答えるならば、それは都市民であった、ということである。特にベドウィンよりも、都市を拠点とするウラマーや長距離交易の大商人が、政治基盤としては重要であった。サウード家の課題は、ベドウィン、特に遊牧民をいかにして支配するか、ということだった。

サウード家は、アナイザ族というアラビア半島で最も屈強だった遊牧部族の出自を誇ってはいるが、明確に語られるサウード家の歴史の中には、遊牧生活を行なった事実は全く語られていない。サウード家の起源は、アラビア半島東部のドルーウという村にいたことまで、遡ることができる。その後、サウード家の先祖は、17世紀後半に現在はディライーヤと呼ばれる土地に移住し、ディライーヤの支配者としての勢力を伸ばして、サウード家の起源となるムクリン家を名乗った。その当時は、バニーハーリドという遊牧部族がナジュドで最強の勢力となっていた。だが1744年ムハンマド・イブン・アブドルワッハーブの伝道を支持する盟約を結んだ後、ムクリン家は、アラビア半島一帯に支

配を拡大し、サウード家を名乗り始めた。第一次サウード朝の支配の社会的な意義は、ナジュドでベドウィンの支配を終わらせ、都市民のベドウィンに対する優位を確立したことであった。ただしサウード家の支配は、主として、定着民の地域に及んだのみで、ワッハーブ主義はいまだに遊牧部族民には本格的には浸透していなかった。そのため遊牧部族民は、1818年オスマン帝国がサウード家の首都を攻撃するに際して、サウード家を裏切ってしまったのである。

サウード家が、遊牧民を本格的に支配したのは、イフワーン運動によって遊牧部族民の指導者たちを定住化させた、20世紀以降のことであり、サウード家の歴史の中では比較的新しい。イフワーン運動は、ワッハーブ主義を遊牧部族へ伝道することを通じて、サウード家による遊牧部族支配を強固にした。

イフワーン運動に関しては詳細を譲るが、重要な社会的意義としてあげられる点は、1920年代、建国の祖アブドルアジーズ・アール・サウードによる支配の拡充の結果として、遊牧部族が、中央政府を打倒に追い込むような軍事力を完全に喪失したことである。部族指導者たちは、中央政府への忠誠を誓い、援助を受ける側におかれることになってしまった。辺境の遊牧部族も、国境を越えて移動することはあっても、国境の枠組み自体を揺るがすような力は喪失した。サウディアラビア王国の成立に伴い、1930年代以降、シャリーアが導入されて、部族慣習法は、その下位に位置づけられることになった。

(2) ワッハーブ主義・サウード家の複合支配の都市性

また第一次サウード朝から今世紀のサウード家の建国に至るまで、サウード家の宮廷を支えてきたのは、ナジュドの定着民であった。宮廷では、部族的出自が明確ではない者たち、奴隷、さらに今世紀に入ってから、エジプト人やシリア人やレバノン人など、アラビア半島以外の地域出身のアラブ人が主力となった。それらのアラブ人は、特に対外関係で重要な働きをした。

サウード家の最大の支配基盤は、なんといっても、宗教的正当性を権威づけてきたウラマーである。だがサウード家への財政的支援を継続してきた、長距離貿易の商人たちも同様に非常に重要な政治基盤であった。遊牧部族民はしばしばサウード家を裏切ったのに対し、ウラマーや大商人の名望家階層は、第一次サウード朝の時代から、一貫してサウード家を支援し続けた。

ワッハーブ主義は、イスラームの一派であるハンバリー法学派に属するが、他のイスラーム諸派のシャリーア解釈と同様に、商業活動について詳細に規定している。イスラームは、しばしば都市の宗教、あるいは商人の宗教であると語られるが、ワッハーブ主

義も同様の特性を有している。ワッハーブ主義は、私有財産を保護し、公的所有を制限し、自由貿易を承認する。また非イスラーム的な課税を制限するが〔中田 1996〕これらの特性は、ワッハーブ主義の発生段階から明確に現れていたと考えられる。

サウード家がアラビア半島の他の支配者よりも成功した点としては、遊牧部族の支配を確立したイフワーン運動がよく知られているが、実はそれと並んで重要な点は、長距離交易を保護する点で他のどの支配者よりも最も成功したことである。

アラビア半島の東部をたびたび支配下においたオスマン帝国は、同地域の治安の安定化には、完全に失敗した。19世紀後半から著しく勢力を拡大したラシード家の場合、勢力伸長の重要な要因は、ハイルを中心とした交易路の保護に成功したことであった。だがラシード家は、カッシムやリヤード地方を支配した際には、同地域の定着民から適切な支持をとりつけることに失敗した。またサウード家の勢力が回復し、さらに第一次世界大戦に直面する状況において、ハイルの交易量は激減したと考えられる。ラシード家がサウード家に敗れた時点では、ハイルの住民の多くが、サウード家への降伏も止むなしと判断していたようである。

ヒジャーズは、13世紀から紅海の交易ネットワークの中心となっており、また二大聖地やジェッダなどの大都市が存在してきた、都市的・商業的色彩の強い地域であった。だがハーシム家は、第一次大戦をはさんで、都市の利益を保護することに失敗した。第一次世界大戦の終了後、ハーシム家は、巡礼路を遊牧部族の略奪から防禦する統治力を次第に喪失した。英国からの経済援助も削減されはじめた1920年以降、財源に苦しむフセイン国王は、商業への規制を強化し、課税項目を増加させることにした。これは、既に衰退傾向にあったヒジャーズ商業にとどめとなる危険があったほど、多岐に及んでいた。1924年9月サウード家は、ヒジャーズ進攻作戦を発動した。するとヒジャーズの商人やウラマーなどからなる名望家たちは、ヒジャーズ祖国党 (al-hizb al-watani al-Hijāzi) を結成し、フセイン国王の退位を要求した。フセイン国王の退位によってサウード家がヒジャーズ進行を中止することを期待したのである。フセイン国王は退位し、息子アリーが即位したが、新国王アリーは、1925年8月軍事的劣勢を挽回するための財源確保を狙ってヒジャーズの商人に重税を課すことを決定した。ヒジャーズ祖国党はこれに反対して、アリーの退位を求め、サウード家によるマディーナ、ジェッダ支配を受け入れることにした。この結果、アリー国王は国外へ脱出して、ハーシム家の支配は終焉し、サウード家によるヒジャーズ統治が開始された。

ヒジャーズを支配したサ우드家は、ヒジャーズ名望家との結びつきを重視した。サ우드家は、ヒジャーズ統治に際して、遊牧部族の性質をもつイフワーンをほとんど重要な役職には任命しなかった。またサ우드家は、巡礼路の保護では著しい改善に成功し、ハーシム家のような無謀な増税も試みなかった。さらにヒジャーズ商人からの要請があったため、アブドルアジーズ国王は、ワッハーブ主義では禁止されている煙草の売買を一定期間許可した。ナジュドのウラマーとヒジャーズのウラマーは、ヒジャーズ占領の後、共同で声明を発表した。

以上にいくつかの事例をあげたが、建国達成直後からサ우드家の支配は、長距離交易に従事する都市民の名望家の利害を反映していた。最終的に遊牧部族民は、イフワーン運動の反乱が鎮圧された時に、それ以前に享受していた政治的独立性を完全に喪失した。以後、遊牧部族は、中央政府に対して軍事的に劣勢な立場におかれ、政府からの経済援助に依存し、反乱はできなくなった。遊牧部族を支配したことは、都市民や長距離交易に最大限に利益をもたらした。

サ우드家の支配体制は、以後で論じられるように、建国後も基本的には変化していない。オイルブーム以後、遊牧部族民は、政治的にも社会的にもますます周辺的な存在とされていったのに対し、建国期で貢献したウラマーや大商人は、建国期以来一貫して、政治的にも経済的にも社会の上層に位置している。

3 . 建国から1960年代まで：部族アイデンティティのサブカルチャー化

3節と4節では、部族アイデンティティの社会的な地位の低下と、サウディアラビアの都市化の関係について議論を進めるのだが、そのために、部族概念と、サウディアラビアの人口動態の特性について説明をしておきたい。

サウディアラビアの政治を部族政治であるとする論者の中の [Hudson 1978:169-182] に最も顕著に現れている例であるが、部族、家族、親族、系譜に関する概念の使用は、しばしば非常に混乱し、明確な区別がほとんどされていない。だが人類学においては、部族イデオロギー、部族集団、家族、親族、系譜概念には、明白な相違がある。

社会集団としての部族を議論するうえでは、部族イデオロギーと部族集団の間に生じうる相違について明確にしておきたい。部族イデオロギーは、部族の結合原理としての系譜や血縁関係などを強調する。だが現実に存在している部族集団の形態や機能は、必ずしも部族イデオロギーで語られる通りに存在しているのではなく、中央政府との関係や生産手段の変化によって、変化、発生、消滅している。また、系譜を共有するある一

つの親族の全てのメンバーが部族集団として含まれるわけではないし、部族集団のメンバーには親族以外の者も含まれることが頻繁にある。

分節集団としての部族集団とは、中央政府が存在しない不安定な状況で、地域の政治的機能を代替的に果たす集団である。部族集団は、原初的な中央政府が存在する「首長制社会」においても政治集団として機能するが、それは「首長制社会」には、中央政府といっても国家のような強力な執行力をもたない、脆弱な中央政府しか存在しないからである。「国家」とは、正当化された強制力を独占的に有する中央政府であり、部族集団は政治集団としての勢力を低下させたり、政治的性格を変化させる。

政治集団としての部族には、人類学では、家族、リネッジ、クラン、部族という分節上の段階が想定されている。リネッジとは、家族や拡張家族よりも大きな集団であるが、系譜を具体的に辿ることができる範囲の最大集団であると考えられている。クランは、共通の出自をもつ人々の集団であるが、明確な系譜はたどることができない集団であり、複数のリネッジを包含する大きな出自集団である。部族tribeは、複数のクランの集合であり、親族イデオロギーで結びついていないクランも含まれる [Baştung 1998]

部族イデオロギーと実際の部族集団の形態が異なるという可能性があるため、急速な近代化に直面しているサウディアラビアの部族について言及する場合には、系譜や血縁などの部族イデオロギーについて語るのか、軍事的政治的集団としての部族集団について語るのか、あるいは、家族について語るのか、常に配慮する必要がある、といえるだろう。

次に、サウディアラビアの階層構造の変化を理解するために、まずサウディアラビアの人口構造の変化について、2つの傾向を指摘しておきたい。1点目は、急速な都市化がトレンドとなっていることである。1950年以来、1990年まで、総人口に占める都市人口の割合は、一貫して上昇し続けている。試算によって異なる数値が現れることもあるが、どの試算でも都市化の傾向は明確に現れている。人口に占める都市市民の割合は、[Krimly 1990] の試算（表1）では、1950年には16%だったが、1990年には80%に達している。[Mushakhkhas 1995] の試算では、1992年に78%である（表2）。ただし遊牧民の人口に関しては、統計によって、著しい低下を示す試算と、それほど低下していないことを示す試算がある。だがいずれにせよ、都市人口の急増のために、総人口に占める遊牧民の割合が低下の一途を辿っていることは明白である。1990年における遊牧民の総人口に占める割合は、[Krimly 1990] のデータでは約2.5%である（表1，表3より）が、[Mushakhkhas 1995] でも6.6%である。遊牧民人口の割合の低下からは、サウディアラ

ピア社会において遊牧民が影響力を急速に縮小しつつあることが裏付けられるだろう。ただし、サウディアラビアの都市人口の増大の理由としては、流入した外国人労働者の大半が都市部に流れ込んだと考えられる、ということも併記しておく。

サウディアラビアの人口動態の第二点目の特徴は、現在サウディアラビアの人口の約半分は15歳以下である、ということである。言い換えれば、現在では1970年代から80年代初頭の石油ブームの後で生まれた若年世代が、人口の半分以上を占めるようになったのである。この「石油ブーム以後」の世代は、高い就学率や高い識字率を誇ると同時に（現在のサウディアラビア全体の識字率は、男子80%、女子60%以上と言われる）、整備されたインフラに囲まれ豊かさを享受してきた、「都市化」の世代である。都市を祖国とする若年世代にとっては、砂漠は、レクリエーションなどの場などであり、現実の経済社会生活の場としては遠いものとなっている。

表1 都市人口の拡大（単位:百万人）[Krimly 1993:334]

	都市人口 (urban population)	総人口	都市人口の割合
1950	0.5	3.2	16%
1955	0.8	3.5	22%
1960	1.2	4.1	30%
1965	1.9	4.8	39%
1970	2.8	5.7	49%
1975	4.3	7.2	59%
1980	6.2	9.2	67%
1985	8.2	11.2	73%
1990	10.4	13.0	80%

表2 人口の社会的分類（1992年） [Mushakhkhaş 1995:75]

	人口（人） %	
都市民 (al-ḥaḍar)	13,220,000	78
地方民 (al-rifina)	2,599,322	15.4
砂漠民 (al-bādiya)	1,109,972	6.6
合計	16,929,294	100

表3 遊牧砂漠民 (nomadic bedouin) の人口の減少 [Krimly 1993:332]

1962	700,000
1970	600,000
1975	495,000
1980	410,000
1990	336,000

(1) 政治集団としての部族の地位の低下

既に第2節で論じたように、遊牧部族は、1930年代には軍事集団としての独立性を喪失していた。1960年代になると、サウディアラビア国内の交通インフラは急速に整備が進み、道路網が全国に張りめぐらされ、国内主要都市の間には航空便が増便され始めた。さらに1970年代のオイルブーム以降は、遊牧部族は、急速に進展する都市化、産業化、教育、定住化、行政機構の肥大化の前にますます周辺的な地位に追い込まれていった。

既に述べたように今では、遊牧民の人口は、全人口の2～7%しか占めておらず、遊牧民の所得環境が大きく改善する見込みもない。サウディアラビアの人口の大半は、都市に住み、教育を受け、行政サービスを受け、第三次産業に従事している。遊牧民については、アラブの伝統的文化生活を担う人々と見なされる一方で、教育レベルが低く、貧しく厳しい肉体労働に従事する、発展から取り残された人々であるという、一種の軽蔑的な見方が発生している。

「部族長」と言及されるものには、「最高部族長」と訳されるべきshaykh al-qabilahと、「部族指導者」とでも訳されるべきshaykh al-fakhdhがある。「最高部族長」は、それを代々輩出する家柄があるのだが、「部族的指導者」たちの上位に位置づけられる存在であると定義付けられる。「部族指導者」は、より小規模な部族集団「リネッジ(アラビア半島ではfakhdhと呼称される集団に相当する場合が多い)」の長である。このレベルの「部族指導者」は、かつて建国以前は、血の復讐を実際に行なう、最小かつ最も信頼できる軍事・治安単位であったと見做されている。fakhdhの長としての「部族指導者」は、現在でもサウディアラビア国内に無数に存在しているが、もはや軍事的単位としての役割は果たしていない。だとするならば、果たして現在、それよりも上位にあたる部族全体を統轄するような政治力を有する「最高部族長」が実際に機能しているのか否かが検討されなくてはならない。

サウディアラビア東部のアジュマーン族に関するHaddaによる調査がある。アジュマ

ーン族は、東部州の中央部に分布し、Coleが論じたアール・ムツラ族やLancasterが研究したルワラ族よりもさらに、定着民と接触しやすい場所に位置している。Haddaによれば、アジュマーン族民は、自らを部族名ではなく、リネッジ名によって名乗り始めた、という。またクウェイトのアジュマーン族の場合は、家族名で名乗っている、という [Hadda 1981:145]。つまり、「クランは解体し、クラン名を覚えているものすら稀となった」という [Hadda 1981:162]。アジュマーン族の事例では、部族集団は、既に解体し始めている。

部族集団の政治的地位の低下は、部族指導者の役割の低下という形で如実に現れている。部族指導者たちは、すでに建国期の段階で、軍事力に劣勢におかれ、独立した政治力としての地位を喪失した。建国後は、中央政府からの援助に依存した経済生活を送っているため、中央政府には反抗できない。建国後になると、部族指導者の職務は、もはや軍事活動や牧畜移動の指揮ではなく、地域の治安体制での補佐的役割や、部族民の間の紛争の仲裁、中央政府と部族民の間の仲介や陳情の窓口となることになった [Safran 1974:141, 151-155], [Cole1975], [Fabietti1928], [El-Farra1973], [Hamad1985]。部族指導者は、建国期には国王に謁見する権利をもっていたが、行政機構が拡充し始めると、地方行政機構が中央から与えられた計画を実行する際に、現地民側の意見の集約を行なうなどの役割しか果たしていないのである。

サウディアラビアの部族集団は、国家警備隊に組み込まれることによって、影響力を保持してきた、という見解がある。国家警備隊に関して検討すると、国家警備隊には、近代的部門と伝統的部門の二つがあるという。国家警備隊の明確な組織図を入手することは困難であるため、知見の限りで説明すると、近代的部門は、出身部族に関わりなく部隊を形成しており、組織の管理部門や近代的な戦闘力を構成していると考えられる。他方、伝統的部門は、ムジャーヒディーンと呼ばれる地方密着的な自衛集団であり、地元の部族指導者が隊長となる、一隊1000人程度の部隊から構成されている。伝統部門は、人員数においては、国家警備隊の約半数を占めている。

表 4 国家警備隊の規模	近代部門	伝統的部門	[Sultan 1988:109-110]
(1984年)(単位:人)	25,000	29,000	

1984年に国家警備隊に所属していたのは、5万4千人、そのうち部族的と見做される部隊には2万9千人が所属していた。[Krimly 1993:332]によると、1980年の時点でのサ

ウディアラビアの非都市民は300万人で、遊牧民はその中の40万人とされている。だとするならば、規模から推測しても、国家警備隊は、特にその近代部門の建設によって、非都市民や遊牧民の統合のために重要な役割を果たしているといえるだろう。

他方、国家警備隊の伝統的部門は、国内の治安機関においては、相対的な地位におかれている。国家警備隊は主要な都市周辺に配備されているが、国防軍は国境から離れた地域に配備されている。内務省（警察）は都市内部に配置されている。それぞれのリクルートに関しては、国家警備隊は遊牧部族から行われているが、国防軍は都市民から、また内務省は南西部の部族民からである。国家警備隊は、国防軍や内務省の存在によって、一定のバランスの中に位置づけられている、といえるだろう。

総じていえば、現在遊牧部族民は、国家警備隊という組織を通じて政府にとり込まれている。同時に国家警備隊の重要性は、他の軍の存在によって相対化されている。つまり、サウディアラビア国家の軍事力に占める部族勢力は、巧妙に相対化されているということが窺われる。

より日常的な社会生活の中での部族集団の影響力を測る研究成果として、部族的仲裁とシャリーア裁判所の選好に関する [Shuwayl 1990] による意識調査を参照することにする。この研究で調査対象として取り上げられたのは、サウディアラビアでは最も開発が遅れているバーハ州の複数の部族である。

[Shuwayl 1990] によると、現在では部族仲裁は、シャリーアによって承認されている仲裁の一形態であると見做されていることが確認されている。その上で、もしも自分が被害者の側で、加害者が過失を認め謝罪している場合、部族的仲裁を選ぶ、と回答した割合は、57%であった。被害者側は、加害者が過失を認めたり謝罪するという、比較的に仲裁を受け入れやすい状況でも、約半数しか、部族仲裁による解決を選択していないわけである。

さらに、部族仲裁が中止され、シャリーア法廷に持ち込まれる頻度に関しては、「ほとんど」と回答した割合が13.5%、「まれに」と回答した割合が65.6%であった。部族仲裁よりもシャリーア裁判所が上位にある裁判所としての認識は、ほぼ定着していると考えられる。

また、もしも自分が過失による殺人の被害者の身内の者であるとして、部族的仲裁を受け入れたいと考える割合は76%であったが、もしも故意の殺人事件の被害者の身内であった場合に、部族的仲裁を受け入れたいと考える割合は19%のみであった。従って、部族的仲裁は、住民の間の訴訟を解決する手段としては、被害者側が和解を受け入れや

すい状況ならば、行われやすいようである [Shuwayl 1990:176, 186, 196, 199, 200]

以上の結果から考察できることは、部族的仲裁は、強制的に課されているものではなく、シャリーア裁判所の補助的機能を果たしている、ということであろう。それは、部族的関係が、イスラーム的制度の下位に位置づけられて機能している一面を浮き彫りにしている。この調査が、サウディアラビアで最も開発が遅れた地域での結果という点からは、サウディアラビア全土でのシャリーア法廷の浸透度が高いであろうということが推察される。

部族集団の解体、部族指導者の役割低下、国家警備隊、部族的仲裁の位置づけについて検討してきたが、遊牧部族集団は、政治的影響力を著しく低下させており、その要因は、イスラームの浸透や行政機構の整備であると結論することができる。

(2) 核家族化と親族ネットワーク

クウェイト人研究者の著作 [Salem 1987] では、湾岸諸国青年のアイデンティティに関する調査結果が報告されている。この調査は、調査票によるアンケート調査をもとに行っている。調査の対象となったのは、バハレーン、サウディアラビア、カタール、アラブ首長国連邦、クウェイトの青年男女計1393人（平均年齢17歳）であった。その中でサウディ人は、わずか111人（8.0%）のみであった [Salem 1987:48-9]。サウディアラビアを含めた湾岸産油諸国は比較的類似した社会発展の過程を辿っているという前提をおくことになるが、この調査の結果を検討してみることにする。

「あなたは誰か」という質問に対しては、「家族名family name」で答えたのが17.6%、以下「国籍」による回答が17.2%、「アラブ」と答えたものが7.2%、「宗教」で答えた者が6.7%であった。さらに「アラブムスリム」と答えたのが3.5%、「その他」47.7%と続いた。「家族名」をあげたものが最多であったが、Salemによれば、家族は、収入、安全securityの基盤であり、アイデンティティの源となることが原因ではないか、という [Salem 1987:50]。また家族とほぼ同じ割合で、「国籍」をあげた回答者の割合の高さも目を引く結果となっている [Salem 1987:55]。Salemによれば、「その他」が高かった理由は、若者が抱く多様な不満を反映しているものだろう、と推測している。

「あなたは、自分をどう位置づけますかidentify」という問いに対しては、「私は、X教を信じる」という答えが47.2%、次に「私は、X国の市民である」が19.5%、以下、「私は、Xの子供である」19.0%、「私は、X部族に属する」が14.4%であった。Salemは、「宗教」と回答した者の割合の高さ、「部族」という回答の回答率の低さが顕著であった、と分析している [Salem 1987:50-51]

「あなたは、どこの出身ですか」という問いに対しては、自分が所属する「国名」か、「アラブ」が一般的な回答だった、という [Salem 1987:51]

これらの結果から現れてくるアイデンティティ構造の特徴を考察すると、湾岸諸国の若者は、家族や国籍への帰属意識が強く、また自分を宗教的に位置づけるという点が明らかになる。また部族アイデンティティの低下が顕著となっている。サウディアラビアの多くの若者が、家族、国籍、宗教をアイデンティティの拠り所に行っているということは、 [Yamani 2000:13] も指摘している。

サウディアラビアの核家族化の実態に関しては、1996年リヤード開発高等委員会が実施したリヤード市に関する調査で、世帯の75%が核家族、19.8%が拡張家族であった、という結果が残されている。核家族化の原因は、大都市における住宅や家計の事情である、という [Sharideh 1999:103-4] ；ただし核家族における子供の平均数は、サウディアラビア国内によって差があるが、5～6人程度を示すという [Sharideh 1999:106]

サウディアラビアにおける部族集団の存続を主張する説では、同族婚を選好する比率が低下しないことが、一つの根拠となってきた。だが1980年代から1990年代になされたいくつかの調査では、同族婚を避けたいという数値が上昇したり、過半数を超える調査結果が現れ始めている [Sharida 1999:115] [Sharbi 1988:167] ；これらの調査結果は意識調査であり、実際になされた結婚の実数を調査したものではないから、実際の同族婚の割合は変化していない可能性もあるため、過大評価はできないが、それでも同族婚を避けたいと考える割合が上昇している点は注目に値する。この調査結果が、短期間のトレンドか、実際の行動として継続的な変化に結びつくのか、今後もフォローする必要があるだろう。

地方においては、以前から残存する地縁や血縁に基づく社会構造が、都市部よりも残存し、部族アイデンティティの温床となり続けている。遊牧民が地方に定住化する場合には、同じ部族に属する者が定住地を形成するケースが多いことを示唆する調査結果がある。カシミールにおける [Shamekh 1972:188] の調査では、遊牧民が定住生活を始めた新しい定住地の人口構成では、平均で、一つの定住地の人口の98.5%が、一つのリネッジ (fakhdh) に属する者であったという。

他方都市では、同じ親族を頼って地方や砂漠から都市へ移住する「連鎖的移住 chain migration」が顕著であると言われているが、ここでは、地方における牧畜民の定住化の場合ほどには、親族関係は利用されていないようである。1977年リヤード市民が住居を選択した理由では、「親族の近く」と回答した割合は、52%であり、上述の98.5%の半分

程度である。住居選択で「親族の近く」と答えた回答をさらに詳細に検討すると、低所得者や地方から直接に移住してきた住民の場合には、高めになる。逆に高所得者や都市から都市への移住者の場合は、低くなる [Gabbani 1984:159-161]。都市における親族関係への依存は、所得や都市生活の経験の長さによって、低下する可能性が示唆されているといえるだろう。ただし [Sharideh 1999:111] によれば、定期的な家族会議への出席などは仕事の都合などのために困難であっても、電話などのコミュニケーション手段の発達のおかげで、家族や親族との連絡は少なくなっていない、という指摘もある。

筆者がサウディアラビアに滞在したときに散見したところでは、都市化された社会状況で、部族的イデオロギーは、以下のようにして、再生産されていると考えられる。都市では、ある部族民が、他の部族民と接触する機会が増大するので、部族アイデンティティが再認識される過程が存在するのだが、都市における部族アイデンティティの覚醒は、部族的な社会構造の裏付けがない部族アイデンティティの覚醒である。政治・軍事集団としての部族、あるいは牧畜経済の基盤を保持するための部族は、都市では存在していないからである。そして都市においては、覚醒された部族アイデンティティは、公式な場での発揚は抑えられるコミュニケーションがなされるようになっている。第一節で指摘したように、一般的に現在の都市的サウディ人は、他の部族出身者と社会的関係を構築するときには、互いの心象を悪くしないようにという配慮を働かせて、自分の部族の優越性を誇示するような態度は慎むようになっている。支配者であるサウード家は、アラビア半島最大の遊牧部族であるアナイザ族の出自を誇っていたのだが、近年ではサウディの教科書から、サウード家は部族出身であることを削除するように指示を発した、という [Krimly 1993:35]

本節を要約すると、現代サウディアラビアの都市社会では、国家、家族、イスラームをアイデンティティの拠り所とする傾向が強まっている。また同族婚が今後減少する可能性が示唆されている。部族的関係は無視できる程弱くなったわけではないが、今や人口の8割を占める都市部では、明らかに弱まっている。

次節で論ずる点は、部族的な関係性は、単に弱まるだけではなく、異なる作用を持ち始めていることである。まず社会的な制度が整備されていない領域には、親族ネットワークが忍び込んでいる。また表面的には変化していないように見える部族イデオロギーすらも、強調点を変化させ、「超部族的コミュニケーション」を表象している。

4. オイルブーム期以降のアイデンティティ形成

(1) 社会階層の形成とレント国家的特質

サウディアラビアにおける階層の分析は、日本における階層研究を較べると多くの制約に直面しているが、以下では、[Sultan 1988] によって提示された、サウディアラビア社会の階層構造について議論する。このモデルでは、上層階級、中間階級、労働者階級という3つの階級に基づくモデルが提示されている。

石油ブーム以後、サウディ政府は、巨大な石油収入を分配することによって、社会構造のあり方そのものに強い影響力を行使し、特定の社会階層を形成する役割を果たした。まず第一に、サウディ政府は、予算の分配を通じて、国家の核集団（上層階級、中間階級）を形成した。サウディ政府が上層階級と新中間階級を形成するために分配したものは、以下のようなものがある。

大土地所有者形成のための大口の土地分配と農業補助金

富裕層が獲得した独占的輸入ライセンス、受注した公共事業、工業化ローン

部族指導者が受けとっている給付

高等教育拡充のための予算

国防軍や国家警備隊の予算

高級官僚への給与

サウディ政府による予算の分配は決して平等的になされたのではなく、建国以前から存在する支配的階層（商人）には手厚かった。例えば、土地の分配の結果では、少数の大土地所有者を生み出す一方で、多数の小土地所有者が形成された。サウディアラビアにおける富裕層と高級官僚には、建国期にサウード家を支援していた商家や宮廷で仕えていた者の末裔が多い。それらの名望家を具体的に提示することは今後の研究課題であるが、建国期と石油ブーム以後で一貫して現れるサウディアラビアの階層構造の特徴は、サウード家と大商人が強く結びついている点である。

[Sultan 1988] のモデルは、サウディアラビアの労働者を上層階級、中間階級、労働者階級に階層化したモデルである。また上層階級、中間階級、労働者階級のそれぞれが、さらに2つの下位分類によって階層化されている。すなわち、上層階級は、さらに上層と下層に、中間階級は新中間階級と旧中間階級に、また労働者階級は、サウディ人と非サウディ人という下位分類が設定されている。

上層階級は、さらに上層階級の中の上層と下層に分けられるのだが、上層階級の上層には、王族、ウラマー、政府高官（閣僚及びに各省次官）、高級将校が分類される。上層

階級の下層には、部族指導者、大土地所有者、富裕層が分類される。上層階級全体は、サウディ人労働者の約6%にあたると推測されている。

表5 サウディアラビアの労働者（1985年時点）[Sultan 1988]

当時の人口総計	サウディ人 600万人	労働者総数 444.6万人
	サウディ人 労働者178.6万人	外国人労働者 266万人

表6 サウディアラビアの上流階級 [Sultan 1988]

上層階級	上層	王族	3,333人
(サ人労働者の6%)		ウラマー	37人
		政府高官	119人
		高級将校	63人
	下層	部族指導者	29人
		大土地所有者	10,345人
		富裕層（貿易業、金融業、工業）	110,105人
		計	113,438人

サウード家は、疑いなく国内での最上層階級に位置する。[Sultan 1988] の分析は、サウディアラビアの労働者の数に基づいている。そこで、王族の人数2万人は、サウディアラビアの平均的家族数6で割られ、3333人と算出されている [Sultan 1988:83]

ウラマーについては、「イスラーム学研究・イスラーム法布告局」(当時13名)、最高裁判所裁判官(当時20名)、勸善懲悪委員長官、苦情処理庁長官、女子教育庁長官、二大聖地諸事情庁長官を合わせて、37名と定義している。

サウディアラビアの官僚機構には1982年のデータによると当時、大臣及びに大臣級の高級官僚は69名、他に副大臣級と次官級には50名が就任していたことに基づいて、[Al-Sultan 1988:84] は、政府高官の数を119名と定義した。サウディアラビアの公務員の給与体系は、さらにそれらの下に15等級が存在し、大臣級と最も下の第一級の月給には30倍の格差があった。

1985年の時点までで、サウディアラビアの閣僚経験者の人数は、計107名であった。それらの全ての閣僚は、定着民の出身である。また政府閣僚ポストは、サウード家とシャイフ家を除けば、商人層の間で比較的平等に分配されている。その内訳は、サウード家

36回、シャイフ家6回、フジャイラーン家4回、その他3回を経験したのが4家、2回を経験したのが6家、1回のみを経験したのが37家であった [Sultan 1988:190]

またサ우드家とシャイフ家という別格を除けば、閣僚には、ヒジャーズとナジュドの両方の家柄が、均等に近い数で含まれている。これは、当初内閣が設置されたときには、能力が高いヒジャーズ人が採用されたが、1960年代になるとナジュド人の官僚が徐々に能力を高めた結果、採用数を増し、今ではほぼ拮抗する数になったから、といわれている。このような経過を経て高級官僚の構成においては地域主義はかなり緩和されたという見解や、そもそも地域主義よりも能力主義が優先されている、という見解がある。

高級将校の規模であるが、国防軍の陸、海、空軍、及びに国家警備隊の近代部門、さらに王宮警備の中では、major general以上の将校が高級将校であると定義し、その人員数は63名とされている [Krimly 1993:99]

サウディアラビアにおける部族指導者については、国家警備隊の指揮官を務めている部族指導者のみを数えている。国家警備隊の中の部族的部隊の人員数は2万9千人であり、一隊が1000人で構成されていることから推測し、29名の部族指導者が国家警備隊の部隊長であると推測している。29名という数は、サウディアラビアの中で勢力規模が大きい遊牧部族の数と近い点で、妥当な数字ではないか、と推測されている。またこの役職を通じて部族指導者は、現在でも部族内で影響力を保持していると推測している [Sultan 1988:110]

サウディアラビアの農民における大土地所有に関しては、1973年のデータで、農民全体では138,667人が数えられているが、そのうち約7.7%にあたる10,345人のみが、10ha以上の耕作地を有し、56.1%は1ha以下の耕作地を有する、という格差がみられた。これは、別の表現では、農民の約7.7%のみが、56.1%の農民よりも多い耕作地を所有していたことになる。10ha以上の耕作地を有するこの10,345人が、サウディアラビアの上流階級に含まれる大土地所有者であると定義されている [Sultan 1988:129-130]

サウディアラビアの富裕層は、銀行業、貿易仲介業、工業などの企業経営者から構成されると考えられる。その規模は、1985年の時点で、サウディアラビア商工会議所に登録された人数をもとにして、110,105人と数えられている [Sultan 1988:193]

上層階級全体の規模に関しては、ウラマー、政府高官、高級将校、部族指導者は、少数であり、おそらくビジネスを兼任していて、商工会議所に登録していると考えられるので、王族、大土地所有者、富裕層の人数を合計した、113,438万人が、サウディアラビ

アの上層階級であると定義されている。

表7 サウディアラビアの中間階級 [Sultan 1988]

中間階級 (サ人労働者の14%)	新	石油会社の管理職	298人
		国防軍、国家警備隊の将軍	11,000人
		大学卒業生	84,377人
	旧	伝統的職人層と中規模経営者	147,574人
		中規模農家	12,000人
		計	255,249人

中間階級は、新中間階級と旧中間階級に分類されている。新中間階級は、大学卒業生、国防軍と国家警備隊の士官、石油会社の管理職が含まれている。旧中間階級は、伝統的職人、中規模農家、中規模企業の経営者が含まれている。中間階級は、サウディ人社会の約14%にあたりとされている。

1985年の1年にサウディアラビアで教育課程に在籍した者の総数は約200万人であるが、1985年までの間にサウディ国内の大学卒業生と海外留学経験者は、84,377人であった [Sultan 1988:223-225]

アラムコを含むサウディアラビアの石油会社における1986年でのサウディ人雇用者数は、約3万6千人であった。そのうちアラムコで、等級15以上の管理職に就いていたのは、298名であったと考えられる。他の石油会社の管理職の人数は不明であり、これだけが唯一入手できた数値であったため、298名を石油関係の管理職としている [Sultan 1988:214-215]

サウディアラビア軍には、1985年には111,300人が在籍したが、その内の11,300名が将校であったと推定している [Sultan 1988:93, 220]

サウディアラビアの伝統的中間階級は、1983年の時点で、雇用者1～19人の中小企業を営む、約15万であると定義している。これはサウディの企業総数の96.7%を占めた。他方参考であるが、雇用者数20名以上の企業は、全体の3.3%を占める約5000の企業である [Sultan 1988:230-232]

サウディアラビアの農民の93%は、1 ha以上の農地を有する大土地所有にはあたらないが、その中で「中間階級」を定義することには特に著しい困難があったようである。

そこで1985年にサウディ政府が行なった発表を基にして算出を行なっている。右の政府発表では、農民を大農民と小農民の2つに分類し、小農民のなかの12,000人のみがサウディ政府による小麦の価格補助を受けることができる、と発表した。これを根拠として、12,000人が中間階層に属する農民であると結論している [Sultan 1988:235]

これらの合計である、255,249人が、中間階級であるとされている。

表8 サウディアラビアの労働階級 [Sultan 1988]

労働者階級 サウディ人 公務員、民間の労働者、零細農業、遊牧部族、漁民、社会保障の支給によって生活を支えている人々1,417,300人（サ人労働者の80%）

外国人労働者（サにおける全労働者の約60%） 266万人

サウディアラビアの労働者階級を構成するのは、大きく分けると、サウディ人と非サウディ人「外国人労働者」である。サウディ人労働者には、公務員、民間の労働者、零細農家、遊牧民、漁民、社会保障の受給者と定義されている。サウディ人の労働者階級は、サウディ人総労働者数である約178万から、上流階級と中流階級にあたる約37万人をひいた残り、約142万人であるとされている。これは、サウディ人労働者全体の約80%を占めるとされている [Sultan 1988:331]

以上に論じてきた、上層階級、中間階級、労働者階級の上層は、サウディアラビアでは、総労働者数の約60%のみに相当する、サウディアラビア国籍を有する者についてである。サウディアラビアの総労働者数の残りの約40%に相当する445万人は、いわゆる「外国人労働者」であるが、これは全て一括して「労働者階級の下層」と定義されている。石油ブーム以後の近代化路線のために、政府は「外国人労働者」の流入を許可した。

以上に提示した [Sultan 1988] の階層分析の結果は、階層の下層に向かって人口が増えていく、ピラミッド型の階層という特徴を示している。他方、[富塚1993] は、データの出所を明らかにしていないが、中間階層が最も人口を多く擁する、ダイヤモンド型の階層構造を示している。他にダイヤモンド型の例には、[Ibrahim 1982] がある。サウディアラビアの階層構造は、ピラミッド型であるのか、ダイヤモンド型であるのか、いまだに論争は決着していないし、本稿ではそれを論じきるためのデータも収集しきれなかった。

以上のような論争が未解決であるとしても、いくつかの点は指摘できよう。その一つ

は、部族指導者の地位は国家の中の最上層にはもはや位置していない。また遊牧民は、サウディ人の中の最下層に位置づけられている。むしろ、都市民である、ウラマー、富裕層、官僚（軍人を含む）が、社会の上層と認められている。

サウディアラビアの階層構造の特性をさらに論ずるためには、国家予算の分配と階層形成の関係に着目する、レント国家論を参照する。[Krimly 1990] によれば、レント国家としてのサウディアラビアの特性としては、以下のような点があげられている。

国家は、予算配分を通じて階層構造を決定する力を有する。

国家は、他の第三世界のように、独裁的社会的政治的動員を必要としない。むしろ国家は、人々に分配するのである。やがて国家が国民から収奪するどころか、国民は、圧力団体のように、国家に対して分配構造の変化を要求するようになる [Krimly 1993:190]

この点についてさらに指摘するならば、現在、サウディ政府に直接に圧力を加えたり、働きかける力を有する社会階層は、ウラマー、富裕層、高級官僚となっている、ということである。

政府は社会的動員が必要ないどころか、むしろそれを避けるようになる。国内からの資源調達に必要であるという経済的背景が基盤となって、政府における決定は非政治化され、官僚的手続きで処理されるようになる。社会的動員の欠如は、国家と市民を結びつけるリンクが少なくなりがちという問題を内在させる [Krimly 1993:222]

さらに後で論ずるが、政党も議会もないサウディアラビアでは、政府と市民を結ぶチャンネルとして、パトロン・クライアント関係などの非公式なチャンネルが形成されている。

分配過程を通じて、国家の中心性が市民の中に拡大している。そのために国家と市民の境界が薄れることとなる。国家は市民に取り込まれ、市民は国家にとり込まれている [Krimly 1993:244]

国家と市民の間の境界が明確ではないことは、サウディ人労働者の過半数が公務員である、という事実が明白に物語る。また国家と市民の間の境界は、このような分配過程のみによってだけでなく、以降で論じていくが、国家機構が流布させている、サウディアラビア国民としての言説によっても、ますます不明確にされている。支配者と非支配者の間の境界の不明確化は、格差が大きい社会階層が存在するにも関わらず、国民の間に「われわれ意識」を醸成させる効果を持っている。

石油ブーム以降、サウディアラビアの「部族的である」と見做されてきた現象の多く

は、石油ブーム以後のレント国家としての発展において現れた、近代的な現象である。例えば、行政の意思決定過程における非公式なネットワークとしての機能もその一つである [Krimly 1993:411]

支配者である王族にとっては、政党や結社が禁止となっている状況では、親族ネットワークやパトロン・クライアント関係が、国民との関係を維持するチャンネルとして有用である [Krimly 1993:339]

また親族関係や非公式ネットワークは、王族にとって有効であるのみではなく、官僚や大商人層にとっても、行政機構に働きかけたり、ビジネスネットワークを形成するために有用である。

さらに中間階級や労働者階級では、親族やパトロン・クライアントのネットワークは、サウディアラビアで非常に多い、カフィール（外国人労働者派遣業）やムアッキブ（許可申請業）といったビジネスに役立てられている [Krimly 1993:336]

親族関係や非公式ネットワークが国民のどの階層においても共通して有効とされているのは、就職の斡旋の場面であろう。サウディアラビアでは、いまだにシステムティックな就職活動の手段が限られ、はっきりした就職活動期すらないし、学校や省庁による職業紹介の機能もそれ程高くはない。そこで親族同士が、就職を斡旋することが、重要な就職のための手段となっている。また会社や省庁では、親類をポストにつけようとするOffice Politicsが行われている点についての指摘もある [Woodward 1988:90-91]

これらの非公式的ネットワークの現象は、同じ部族の出身者は助け合うべきであるという「部族イデオロギー」によって正当化されている行為なのであるが、少なくとも政治的軍事的部族集団の特徴である「部族指導者の権威」や「分節システム」や「部族集団の成員による合意形成」などとは、無縁の現象であろう。また「部族的社会集団」は、都市的な非公式ネットワークへ再編されることによって、一方では活用されているのだが、他方では変化を受ける対象ともなっている。サウディアラビアにおいて都市に適応した親族的な関係性の実態に関する研究調査は、今後の課題となっていると考えられる。

（２） サウディアラビア・アイデンティティ形成の諸装置

サウディアラビア・アイデンティティの創出には、まず第一段階として、異なる部族アイデンティティを有する諸部族を統合するための、超部族的コミュニケーションが創出される。そして次の段階で「部族アイデンティティ」も「超部族アイデンティティ」も動員しないタイプの、国民アイデンティティの創出が進行している。

超部族的コミュニケーションは、互いの部族慣習の対立点よりも、共通点を強調する言説を流布させることによって成立する。その際には、連帯意識を創出するために、部族的な発想や感性に訴える物語が用いられる。

超部族的意識の創出のための装置としては、毎年リヤド郊外で開催されるジャナドリーヤ祭があげられる。その祭りでは、ナジュドをはじめとしたサウディアラビア各地の古い生活習慣や部族的慣習が展示される。この祭りは、様々な習慣が「サウディアラビア各地の」習慣というパッケージをされることによって、超部族的融和を演出する一大装置である。この祭りについては、テレビ、新聞、雑誌などによってサウディアラビア全土で放映されるが、ナジュド起源の文化が超部族的起源としてのサウディアラビア文化の起源であると錯覚させるかのような演出となっている。

超部族的コミュニケーションでは、共通の出自、同一の文化、宗教、言語、が共通すると強調される。

共通の出自

サウディアラビアの統合は、当初、理念的にはイスラームを統合原理とし、情緒的には「われわれはアラブ」という仲間意識をもとに達成された。当初、サウディアラビアの現領域を適確に指し示す、地域概念は存在していなかったため、「アラブ」という概念を用いたのである。「アラブ」という概念には、中東全域に広がる「アラブ」という意味と、アラビア半島のことを指す「アラブ」という用法がある。この場合の「アラブ」は、後者の用法から由来していると考えられる。サウディアラビアの統合に使われる言説としての「アラブ」のイメージでは、アラブ諸部族の源流を生み出した土地、あるいはイスラームの発祥の地としてのアラビア半島が、中心をしめている。ただし、建国後次第に「アラブ」概念は、情緒的には「祖国（ワタン）」概念、政治的には「王国」概念に置き換えられていく過程におかれている。

同一の文化

アラビア半島の服装には、建国後しばらく後でも、各地域によって異なる個性があった [Katakura 1977:78] だが、もともとナジュドのワッハーブ主義的な起源を持つ、男性のトーブや女性のベールは、現在ではサウディ人の標準的着衣となっている。これは、ナジュドの慣習が、サウディアラビアの慣習として受け入れられ、国民文化とされた例である。その他の例としては、食生活もあげられるだろう。サウディコーヒー、なつめやし、カプサなどは、各地域で調理方法や品種に多少の差異があるが、今では「サウディアラビアの国民文化」として認められている、といえるだろう。

宗教

イスラーム教スンナ派が人口の95%以上を占めると推測される。建国以前にはヒジャーズなどに、ハナフィー派やシャーフィイー派が多数存在したが、建国後は「イスラームは一つである」というスローガンの下に、スンナ派内の法学派の違いは些細なことであると宣伝され、ハンバリー派の支配が作りあげられた。また東部州にシーア派がいたり、南部州にはザイーディー派が存在すると言われるが、エジプトのコプト教徒やレバノンなどと比較すれば、人口の中に大きな宗派的な亀裂はない状況である。ただし、もちろん、シーア派住民やザイーディー派住民が、スンナ派住民と等しいサウディアラビア国民アイデンティティを共有できているとは考えられない。両宗派に関するデータは、著しく不足しているため、詳細は今後の検討課題となっている。

言語

異なる部族の出身者がコミュニケーションを行なうための「部族際語」の存在の有無が、部族間の融和のための重要な道具として指摘されている〔川田 1988: 284〕。サウディアラビアの各地には口語方言があるが、石油ブーム以後の教育拡充の結果として識字率が向上する以前から既に、アラビア語は「部族際語」として十分に機能してきた。

さらに、サウディアラビアの住民の間に「われわれ意識」を生み出した、共通の要素としては、人種が、あげられるだろう。

人種

アラビア半島出身者の場合、身体上の特徴は類似していると考えられる。サウディ人には、アラビア半島系のみならず、少数派になるが、先祖がコーカサス、アジア、アフリカ、他のアラブ地域、ヨーロッパ系である人々が混在している。歴史的にアラビア半島には、他地域からの難民や巡礼者などが流入してきたからである。だが、イスラーム教が人種差別を禁止していることが、融和要因となっている。むしろ、サウディ人と外国人労働者の間の国籍の違いに由来する法的立場の相違が、明確な差異となっている。外国人労働者は、サウディ人の「外部」として、サウディ人内部の同胞意識の形成を促した。

先にも言及したが、同胞意識形成の第二段階である、「部族アイデンティティ」も「超部族アイデンティティ」も利用しない、国民アイデンティティの創出段階になると、サウード家は、遊牧部族出身であることを学校教科書から削除させた。

超部族的ではない、サウディアラビア国民としての意識の形成の装置としては、教育、

マスメディア、青年（シャバーブ）クラブ、宗教制度などの全てが用いられている。1963年に情報省が設置され、検閲を担当しているが、現在サウディアラビアの全ての民間の新聞会社は、国家から補助金を受けている。

ワッハーブ主義教義の保護のためとして行われている宗教的検閲は、モスクでの説教内容、教育教材の内容とカリキュラム、メディアの報道内容、公的な場での議論の内容を制限している。これらの宗教的検閲は、現王制を保護するための政治的検閲としても機能している。

ほかにサウディアラビア・アイデンティティ高揚の装置としては、青年福祉庁によって、サッカーを代表とするスポーツの振興が大規模に実施されている。1994年サウディアラビア代表チームは、ワールドカップサッカーチャンピオンメントーナメントに初出場したが、歓喜するサウディ人は、首都リヤドの繁華街が渋滞となるほどに溢れ、国旗を振りかざして勝利を祝った。スポーツ振興は、政治的にも宗教的にも、国家政策に抵触することなく、サウディアラビア・アイデンティティを喚起できる装置である。

以上のようなサウディアラビア・アイデンティティ形成のための諸装置は、全て、国家による統制を受けている。すなわちサウディアラビア・アイデンティティの形成は、国家主導で行われてきたのである。

（3）イスラーム的伝統の創造と「アッラー、そして王と祖国」アイデンティティの覚醒

サウディアラビアにおけるムスリム・アイデンティティの覚醒は、5つの段階を経ている。第一段階は、第一次サウード朝から建国期まで、である。この段階のムスリム・アイデンティティの覚醒では、アラビア半島の他地域やオスマン帝国などのムスリムに対峙する、イスラームの正統派（ワッハーブ主義）としての自己イメージが投影されていた、といえるだろう。

第二段階は、サウディアラビア王国の建国後の時期であり、部族や地域対立を乗り越え、統合を進めるため、ムスリム・アイデンティティが覚醒されていった時期である。

第三段階は、ファイサル国王が、アラビア半島に浸透し始めたナセリズムに対抗するためのイデオロギーとして、汎イスラーム主義を利用し始めた時代である。1950から60年代のアラビア半島へのナセリズムの浸透や、それに対抗してファイサル国王がイスラーム・イデオロギーを利用した過程については、多くの著作が書いているところなので、本章では詳細は論じない。[Piscatori 1981=1985] が指摘しているように、ファイサル国王は、イスラームイデオロギーを利用することによって、ナセリズムに効果的に対抗できたのである。

第四段階は、石油ブーム以後であるが、近代化に直面したサウディアラビアの価値観の支柱として、「近代とイスラーム」の調和が提唱され始めた時期である。また国家主導ではない、イスラーム意識の覚醒が現れた事例として、カアバ神殿占拠事件（1979年）があげられる。

第五段階は、湾岸戦争以後で、サウディアラビア・アイデンティティとムスリム・アイデンティティの両方の覚醒が同時に進みつつあり、両者の間の調整も必要とされ始めた時期である。この時期に関しては、第四節でさらに論じることにする。

そこで本節では、第四段階についてさらに議論を進めることにする。石油ブーム以後、サウディ人は、石油収入の増加によって発展への自信を持ち始めた一方で、既存の価値観が揺るぎ始めたことへの不安を抱き始めた。また発展の契機が「石油収入」であり、実際には外国人労働者が発展をつくりあげた部分が大きいことを外国から非難されることに違和感を感じ、コンプレックスを刺激された、と考えられる。「イスラーム的伝統の創造」は、このようなアイデンティティの不安定化を解消する効果があった。

政府の5か年計画は、「イスラームに基づく近代化」をイデオロギーとして提唱している。その一方で、政府の予算配分の実態は、社会の上層階層に手厚く補助金を分配する構造であった。前節で指摘したように、この上流階級は国家と共通の利害を有しており、またサウディアラビア・アイデンティティ創出の装置は、国家が全てコントロールしている。すなわちこれらのことを総合すれば、サウディアラビア・アイデンティティの形成は、支配階層と国家の主導によって推進されている、と考えられる。

サウディアラビア国家が国民の間に広めようとしている国家アイデンティティは、「アッラー、そしてマリクとワタンAllāh, thumma al-Malik wal-Waṭan」（イスラーム、そして王と祖国）というフレーズに要約されるだろう。これは、「サウード家に忠誠を誓い、祖国（サウディアラビアの領土）を共有するムスリム」というアイデンティティ複合を覚醒させようとする意図を表している。このようなフレーズは、サウディアラビアの街角では、みかけることはできない。筆者は、このフレーズがキングファイサル空軍学校の内部に看板として掲げられているものを目にした。このフレーズは、国防を担う兵士に、サウディアラビアの独特な国家体制への忠誠心を植え付けるための巧妙なスローガンであると考えられる。またこのフレーズは街角には掲げられていないが、実は国家が、兵士だけでなく、サウディアラビア国民全体にも浸透させようとする意図している価値観であると考えられる。

この学校の卒業式のセレモニーの中で、スルタン国防航空相は、送辞の最後を以下の

言葉で締め括った。「全能なる至高のアッラーよ、このウンマを護りたまえ。またこのウンマを復興した二大聖地の守護者に健康と長寿あれ。皇太子兼副首相殿下を護り給え。諸君の歩む道に祝福あれ。祖国（ワタン）に安全と安定、繁栄と栄光を」。空軍学校の卒業生の代表は、答辞の終わりに以下のように宣言した。「閣下が我々の卒業式を主催し給われたことに深謝します。アッラーが、われわれの『くに（ビラードbilād）』に永遠なる安全をお恵み賜れますように。また二大聖地の守護者である国防軍最高長官閣下、皇太子殿下、及び大臣閣下が、われわれをお守り下さいますように」。[*Al-Riyād*, June 23, 1994] これらの送辞と答辞では、アッラー、ウンマ、ワタン、ビラードなどの概念がやりとりされた。このやりとりの中には、「アッラー、そして王と祖国」というスローガンの精神を植え付けようという、国家の意志が反映されていると考えられる。そこで「アッラー、そして王と祖国」という言説を、「アッラー、そして王」、「王と祖国」、「イスラーム、そして祖国」の3つの要素に分解しながら、解釈を試みると、以下のようになるだろう。

スルタン国防航空相は、「ウンマ」という概念を用いた。彼の言及した「ウンマ」のイメージは、イスラームの共同体の一つであるサウディアラビアという意味と、世界に広がるイスラーム共同体ウンマの中心としてのサウディアラビアという、2重の意味が重ねられていると考えられる。サウディアラビアが二大聖地を有していることから、サウディアラビアの国防は、イスラームの防衛でもあるのである。このために「サウディアラビア」のことを「ウンマ」と表象できる、意味上の曖昧さが発生しているのである。

「イスラーム、そして王」の組み合わせには、サウード家こそが、ワッハーブ主義を支えてきたのである、という意味が内包されている。18世紀に布教を開始したムハンマド・イブン・アブドルワッハーブは、サウード家の保護を受けることにより、初めて伝道活動が軌道に乗り始めた。だがサウード家がムハンマド・アリー朝やラシード家に敗北するたびに、ワッハーブ主義者は、辛酸を舐めてきた。サウード家の安定した統治が、ワッハーブ主義の繁栄の権力基盤であることは、サウディアラビアの人々、特に長老ウラマーには、歴史的教訓として強く認識されている。サウディアラビアのワッハーブ主義は、ジハードや対外的な伝道活動を積極的に行なった歴史があるとはいっても、所詮はサウディアラビア王国という、一国主義的な権力基盤に依存している、という一面があるのである。

だが「イスラーム、そして王」の組み合わせ、また「王と祖国」の組み合わせには、ある種の違和感が意味に内在する。

「イスラーム、そして王」の組み合わせが内包する違和感に関して語るには、本来のイスラーム的統治はカリフが司るべきものとされていることがスタート地点となる。その後イスラーム政治学には、シャリーアを施行するならば、カリフでも王でも統治者として認められることができる、という学説が発達したが、だとしても、王には、压制者という意味的ニアンスが内在し続け、それを完全に拭い取ることはできない。このような「王」という一語が含まれるが故に、「イスラーム、そして王」という言葉には、違和感が残る。このため「イスラーム、そして王と祖国」というスローガンは、ワッハーブ派ウマラーからの強力な反発が予想されるから、街中には揚げられないのであろう。サウード家は、イスラームの保護者とされ、シャリーアを施行する統治力を正統性の基盤の一つとしているが、これはウマラーや国民からは半信半疑で見られている。サウード家は、聖地や巡礼の管理に成果をあげている一方で、汚職をしたり、特権階級としてイスラーム法を守っていない代表者であるとも、知られているからである。サウード家という支配者は、ワッハーブ主義の存続にとって必要不可欠な権力基盤をもたらすと同時に、その特権がワッハーブ主義の理想を汚しているという、両義的な意味を持っている。多くのウマラーは、これら2つの側面を天秤にかけて現実的に判断をする眼をもっている。

なお「アッラー」と「王」の間に「そして (thumma)」の一言が入り、「アッラーと (wa) 王」のように、アッラーとは何者をも併置しない表現をとる理由は、タウヒードの教義に忠実であり、アッラーと並ぶ存在を一切認めないワッハーブ主義の世界では、日常のごく当然に用いられる用法である。

既に論じてきたように、現在ではサウディ人の間では、部族主義や地域主義が完全に払拭されたわけではないにせよ、かなり緩和されている。そして、一定程度の「われわれ意識」を共有し始め、サウディアラビアの領域を「祖国」であると見做している。先の卒業生代表は、「ワタン」ではなく、「ビラード」という語を用いた。「ビラード」は、「ワタン」よりも情緒的な意味合いが強く、「くに」という意味をもつ「バラド balad」の複数形である。兵士の側はサウディアラビアについて、愛着を込められている「くに」の複数形で表象したことにより、兵士の様々な出身地域の集合としてのサウディアラビア、というニアンスを表象した。これに対し、スルタン国防航空相は、「祖国 (ワタン)」という、どちらかという領土概念の意味合いが強い語を選択したが、この語は一つの統一された地域としてのサウディアラビアとしてのニアンスを醸し出そうとしている。

部族的群雄割拠の記憶もまだ生々しいサウディアラビアでは、王という響き自体に、征服という意味合いは払拭しきれてはいない。したがって、「王と祖国」のスローガンの

組み合わせは、サウディ人には、「サ우드家さえいなければ、自分の祖先は、政治的独立性を維持していたかもしれない」という想像を呼び起こし、違和感を残してしまう。しかし実際のところサウディ国民には、サ우드家は、崩壊する気配など感じさせない圧倒的に強力な政治的存在として君臨し、その存在に関して絶え間なく解釈を人々に迫っている。支配層にとっては、「王」をどのように国民に受け入れさせるかが、恒久的な課題となっている。「王と祖国」が文法的には同等に並べられていることは、「王」の存在を受け入れやすくしているが、やはり順序としては「王」が先に来て「祖国」が続くことが、「王」の権勢を暗示している。

サウディアラビアの人々は、「イスラームと祖国」の組み合わせに関しては、完全に肯定的である。イスラームは理想的価値観であり、祖国には愛着を感じる。「イスラームと祖国」は、サウディアラビアではごく僅かでしかない世俗主義者を除けば、人々が受け入れることができる、理想と愛着の対象なのである。

以上のような議論から、「イスラーム、そして王と祖国」の組み合わせは、「イスラーム」と「祖国」が、「王」の語が持つ違和感を緩和する重要な働きをしていることが確認できる。また「王」は、事実として、除去することはできないし、完全にイスラームに反していると断定することが難しい存在である。ならば、人びとには、「王はイスラームを保護している」というサ우드家の主張を受け入れてしまう方が、現実的な政治的選択となる。また別の側面から指摘すれば、イスラームは、常に王が圧政と転化する危険を抑制し、祖国を保護するための唯一の拠りどころとなる価値観でもある。この観点からも多くのサウディアラビア人は、祖国のためには、イスラームとワンセットにして王を受け入れざるを得ない、という結論に達する。

「イスラーム、そして王と祖国」という組み合わせを国民に受け入れさせるため、国内で流布している言説は、以下のような内容の言説であるが、これらの言説は、サウディ人の情緒に訴えるという点でも巧妙である。以下の言説は、第一に、国内の階層格差やサ우드家支配の暗部を覆い隠している。また第二に、国民のプライド意識を刺激し、国民の一体感を呼び起こしている。

なお本章では、「イスラーム、そして王と祖国」を国民に受け入れさせるための言説を、主として [Yamani1998] や、サウディアラビア国内の建国記念日などに発刊された新聞記事に依拠して、まとめることにした。Yamaniは、現在よりも柔軟なイスラームの解釈に基づいた現実的な近代化路線をサウディアラビアは進むべきであると主張する立場にあり、しばしばサウディアラビア国内の政治的ウラマーからは「世俗派」のレッテルを

貼られるものの、基本的には、イスラームを基盤としたサウディアラビア国家の発展を目標としている。

世界での、OPECでの、途上国での、またイスラーム世界でのサウディアラビアの重要な役割を強調して、サウード家の国家というイメージを払拭し、サウディアラビア人としてのプライドを昂揚する言説

サウディアラビアの富は石油収入が源泉であるが、この事実を逆転した視角から再解釈して、「世界は、経済的にサウディアラビアに依存している」と理解される。そしてサウディアラビアは、国外への援助を拠出している国家としては、先進国以上の活躍をしていると語られる。曰く、「過去25年間、サウディアラビアの一人当たりの援助支出額は、圧倒的に世界最高で、GNP 6%に達する」。「ザカートやサダカによる、プライベートな援助は、病院、学校やモスクの建設、孤児や難民への援助に用いられている」。これは、「工業国の援助（ヒモ付き）よりも気前がよい」という。もちろん、サウディアラビアがイスラームのために貢献している点も強調される。「サウディ政府によるメッカ、メディナの整備は、世界のムスリムに貢献している」。

イスラームの導きと安定によりサウディアラビア王国は発展しているという言説

まず、サウディアラビア王国の建国は、部族社会はイスラーム社会へ転換することにより、平和と発展の基盤を確立したことが語られる。またサウディアラビアの政治体制に関しては、「イスラームは、法の下での平等と人権を保証する、民主的な仕組みである」と語ることによって、サウード家による支配体制を受け入れることを可能とさせている。そしてイスラームは、あらゆる社会問題への処方箋であるかのように語られる。「世界に共通する現代の諸問題には、麻薬、汚職、治安の悪さ、家庭の崩壊、物質主義がある。しかし、サウディアラビアは、非常に良好な状態にある。それはイスラームが解決策だからである」。そして、サウディ人は、イスラームを基盤に据えた独自路線へのプライドを抱くようになる。「サウディアラビアは、独自の路線を進むことを西洋に知らせるべきである」。

歴史：偉大な先祖と発展への努力の物語

外国人がサウディアラビアに関して抱く「サウディ人は、楽しんで儲けている」という軽蔑的なイメージを払拭し、サウディ人の努力や倫理が強調される。「海外メディアでのサウディ人は、幸運な遊牧部族、金持ち、プレーボーイである。しかしわれわれの実態は、アラブの砂漠を打ち砕き、互いに暖め合う人々の心の中にある。またシンプルな生活の中には、尊敬、もてなし、最も苦しい時の相互扶助が存在する」。もちろん先祖が部族民であったことには言及しないことにより、国民としての間の連帯意識が喚起されている。

さらに「石油の発見は、勇気ある男達の努力、将来を見据える眼力を持った指導者の決断、闘争と勝利の物語である」と語られ、石油採掘における外国からの援助には言及しない。「建国の英雄アブドルアジーズ」の物語は、征服者の物語であることを止め、サウディ人のプライドと転化する。

また悠久の時の流れを有するアラビア半島の大地にイスラームが発生したというイメージを操作し、イスラームの宗派による差異などには言及しない。「砂漠...それは、預言者が生まれ、メッセージを広めた、真実の源」。

そしてサウディアラビアは、国民や指導者の努力と倫理、さらにイスラームの支えにより、現在までに産業、教育、農業など多岐にわたる近代的発展を遂げることに成功をおさめ、この発展が将来も継続するであろうと語られる。将来の発展への希望は、国民の一体感を高揚し、若者を激励する物語なのである。

特に農業の振興は、厳しい砂漠で生き抜き、将来も発展するだろうサウディアラビアのメタファーとなっている。「農業は、砂漠の征服である。努力の結果である。農業への補助金は、イスラエルでも、米国、欧州、日本、どこでも拠出されている。サウディの農業は成功している」。

サウード家の偉大なリーダーシップによって、サウディアラビアの富を狙う外敵に打ち勝つ物語

現実としてサウディアラビア王国における国民統合の進展は、サウディ政府の安定した強固な支配の継続が大前提として必要不可欠であった。しかし今後もサウード家が、支配の正統性を確保するためには、サウード家が国家運営において傑出した能力を証明し続けることが重要である。サウディアラビア・アイデンティティ形成のための物語では、サウード家のリーダーシップの卓越さが語られる。「今日のサウディアラビアは、偶

然と幸運の産物ではない。リーダーシップの成功は明らかである。』サウード家を称揚する言説は、マジュリスにおける王族に対する、直立、キス、握手、抱擁などの儀礼的振る舞いによっても表現されている。

サウード家のリーダーシップの「最も重要な点は、人々から奪うのではなく、人々に多くを与えること」であると語られる。レント国家としての分配制度は、サウード家のリーダーシップの成功として語られているのである。

そして、外敵に打ち克って、サウディアラビアの将来の存続と繁栄を確保するためには、サウード家の舵取りが必要である点が強調される。「サウディアラビアは、国内と国外の敵に直面している。国内の敵は、宗教的保守派や過激派である。外敵は、サウディアラビアの石油の富を狙っている。」

またイスラーム国家としてサウディアラビアが繁栄していることを語る物語では、第一次サウード朝の時代に、ムハンマド・イブン・サウードとムハンマド・イブン・アブドルワッハブの邂逅以来、サウード家が「正統なイスラーム(ワッハブ主義)」の発展のために奉仕してきたという物語が不可欠である。そこでサウード家の歴代のイマームや国王の敬虔さが、強調されることになる。建国のために獅子奮迅の活躍をしたアブドルアジーズ国王の物語は、サウード家の正当性の源泉となっている重要な物語である。そして物語の締め括りは、現在在位中のファハド国王の偉大な治世を強調する物語である。これらの歴史物語は、サウード家が、今後もイスラームを保護し、適切な政治政策をとり続ける能力があることを立証する物語となっているのである。建国記念日になると、世界各国からファハド国王へ祝電が送られたことが新聞上で誇示され、サウディアラビアの存在とサウード家の支配が、世界中から祝福されているかのような印象を国民に植え付けている。

ほとんどのサウディ人には、サウード家の支配体制が崩壊する予兆など感じられていないが、自分たちの支配者を「圧政者」や「征服者」として認めることには、たとえイスラーム政治学が「強者の支配」を容認しているとはいえ、自分が敗北したり妥協しているという、一抹の感情的悔しさを生み出してしまう。「サウード家の英雄伝」は、その悔しさを忘れさせる効果を持つ物語でもある。

現在のファハド国王は、「二大聖地の守護者である国王khādim al-ḥaramyni al-malik Fahad」という称号を冠し、イスラームの後見人としての立場を正統性の源泉の支柱としている。「二大聖地の守護者である国王」という称号は、「アッラー、そして王と祖国」という複合アイデンティティをもつ国民には、単なる「国王」よりも受け入れやすい。

以上にその一端が解説されたサウディアラビア国民の物語は、どの部族出身のサウディ人でも、共有可能なストーリーになっていなければならない。現実にはサウディアラビア・アイデンティティの成立には、外国人労働者という「外部」の存在が大きな契機となっているが、その点については言及されない。国民に関する物語が、真実なのか、虚構なのか、という点は、当然ながら重要なことではない。以下の3点が達成されていれば、支配階級にとっては充分である。一定の（半信半疑の）妥当性が感じられるストーリーとなっていること。サウディ人が公式な場でどのように振る舞ったり、発言すべきかを制御するための行為モデルとなること。このような行為モデルを用いて、国家権力は、社会的コミュニケーションに規律を与えることができる。サウディ人には、国民としての感情的昂揚を呼び起こすことができるストーリーであること。

5. 湾岸戦争以後の新たな展開：ムスリム・アイデンティティとサウディアラビア・アイデンティティの相剋

前節までで、サウディアラビア・アイデンティティが成長しつつあることを論じてきたが、その限界について以下で検討を行なう。

(1) アラブ・アイデンティティ、ムスリム・アイデンティティ、サウディアラビア・アイデンティティの間の矛盾が未解決

第4節の(2)や(3)で論じてきたように、「われわれはアラブ」という言説や、ムスリム・アイデンティティの強調が、サウード家の支配の正統性や、国民の間の一体性を高めてきた。しかし、[Atar 1988]は、サウディアラビアにおける教育は、サウディアラビア・アイデンティティの形成に役立てられてきたばかりではなく、アイデンティティにおける不確かさを生み出す原因ともなっていると論じている。

1980年代に、公教育における宗教教育の時間は、1940年代よりも多くの時間が割り当てられるようになった。その一方で、Atarの懸念によれば、アラブ、イスラーム、サウディアラビアの中のどのアイデンティティが優先するのか、学校教育では明確に教えられていない、という [Atar 1988: 151-165]

教科書のある部分では、「アラブは、分割できない一つの単位である。アラブは、一つの民族」[Atar 1988: 151]として、アラブ人としてのアイデンティティが強調される。

しかし、「アラブ民族の歴史文化について強調される」一方で、「イスラームのウンマに関する信仰が提唱される」。そして「実際のところ、ムスリムは、非常に多様なのであ

るが、その点については説明されない」[Atar 1988: 163] この結果としてAtarが怖れていた不安は、イスラームの一体性を強調しすぎると、現実には多様なムスリム社会が存在しているという現実のために、常に理想から阻害された状態をつくり出すことになり、その結果として外の脅威に対して弱い社会を作りだしてしまう、ということだった [Atar 1988: 165] Atarによれば、「教科書の編集者が誰だったのかは不明だが、ムスリム同胞団の考えにそっくりである」という [Atar 1988: 161]

アラブ、イスラーム、サウディアラビアへの帰属意識に優先度が決定されなかった原因の一つには、サウディアラビアの教科書作成には、ウラマーやエジプト人官僚が力を持っていたことも、原因の一つなのではないか、と推測できるが、筆者の知るかぎり、検証を行なった先行研究は見当たらない。

Atarが執筆していた当時の1980年代後半、サウディアラビア国内の教育関係者によっても、サウディアラビアの歴史文化に関する教育が少ないことが問題であると認識されていた、という [Atar 1988: 161] 実際のところ、1975年に実施された大学のカリキュラム改革は、イスラームに関する授業を増加させる方向で実施されたが [Faheem 1982:187-8] Atarが不安視していた矛盾点を解消するには、至らなかったのである。

Atarの危惧は、湾岸危機以降に現実化してしまったと考えられる。湾岸危機に際してサウディアラビア国内では、「多国籍軍はイラクの脅威からサウディアラビアを防衛するために必要である」と見做す立場と、「多国籍軍はムスリムやアラブへの敵である」と見做したイスラーム主義勢力が、対立した。そして「多国籍軍はムスリムやアラブへの敵である」と見做したウサーマ・ビン・ラーディンのネットワークは、湾岸戦争以後、サウディアラビアなどで反米のテロを繰り返した [中村1999] 仮定のストーリーであるが、もしも多国籍軍の受け入れが実行されなかったならば、既にサウディアラビア王国が存在していなかった可能性は高かったであろう。サウディアラビアの存続のためには、国防や外交のために、サウディアラビア・アイデンティティが、ムスリムやアラブとしてのアイデンティティよりも重視されなければならない状況もありえるのではないだろうか。

このような点に気付いているサウディアラビア人も増えている。最近では1996年、ラシード教育相が、「現在の国家的危機を乗り越えるためには、教育内容の変更が必要である」と発言した。同教育相が、今後さらに力を入れていくべき点としてあげたのは、イスラーム的価値観の重視、 サウディアラビア建国精神の育成のための歴史教育、愛国精神の育成、 アラブ・イスラーム共同体の中心にあることの自覚、であった。サ

ウディアラビア国民としての自覚を育成すべきであるという教育省の姿勢が、公的な場であつてないほどに強く表された発言であつた [*Al-Riyād*, Sep.11, 1996]

本節で明らかにしてきた、サウディアラビアにおけるアイデンティティの組み合わせの変化の構図について整理すると、部族アイデンティティに代替させるために建国期に流布された「イスラーム、そして王とアラブ」の組み合わせは、「イスラーム、そして王と祖国」の組み合わせへの移行の途上にあつた。だが湾岸戦争を機に、王制を批判し、ムスリム世界の一体性を強調する「脱領域」ムスリム・アイデンティティの高揚が発生した。また他方では、そのような「脱領域アイデンティティ」を危険視する立場が現れ始めた、という構図となる。この構図が将来どう進展するのかについて予測するなら、今後、イスラームをアイデンティティの拠り所としている状況が変化するとまでは考えにくく、「イスラーム」の解釈や適用方法をめぐる論争が焦点となる可能性が高いといえるだろう。

サウディアラビア・アイデンティティの成立には、サウード家の支配を正統化するためにも、ウンマの統一の理念を掲げ、アラブという一体感を強調することが不可欠だった。この組み合わせは現在でもかなり有効であると考えられるし、アイデンティティは本質的に多層的であるという性質をもっているものでもあるが、安全保障問題や外交政策では、サウディアラビア国家の防衛の重要性が認識されるための、新たな論理が必要とされている。

(2) ワッハーブ主義は、国民創出のために使える文化的装置を制限する

国民創出の装置として [Smith 1985=スミス:159] が例示したものは、祝典、パレード、集会、音楽、演劇、芸術、建築である。これらを例として取り上げてみると、サウディアラビアでは、サウディアラビア・アイデンティティの創出のために利用できる文化装置が、ワッハーブ主義の教義によって著しく制限されている、といえるだろう。

国家的祝典は、サウディアラビアでは、偶像崇拜にあたりと判断するウラマーの反対により、長らく禁止されてきた。アブドルアジーズ国王が、1931年に王位(スルタン位)戴冠10周年記念行事を行おうとしたときには、ウラマーによって反対された [Zirikli 1992:744]。また1952年にリヤード奪回50周年記念行事を行うとしたときも、イスラームにはそのような前例はない、と主張するウラマーの反対により、実施されなかった [Zirikli 1992:743]。だが1998年、初の国家的祝典として、リヤード奪回100周年記念祭が実行された。国家的祝典はやっと始められたばかりであるが、これは大きな変化であるともいえる。

パレードは、サウディアラビアでは、軍隊が閱兵式などでのみ行なう、限定された状

況にある。またサウディアラビアでは、集会は禁止である。人が集るような場は、公式行事、サッカーの試合と礼拝ぐらいのものであろう。

音楽としては、歌詞がない国歌が存在したり、部族の伝統的音楽がある。サウディ人の国民的歌手はムハンマド・アブドなどの名が思いつくが、他のアラブ諸国とくらべればまだそれほど音楽活動の歴史が蓄積されているとはいえないのではないだろうか。演劇や絵画の創作は、元来ワッハーブ主義では禁止であるため、青年文化庁が一定程度の普及活動を行っているが、いまだに非常に小規模である。

建築に関しては、伝統的にはナジュドでは泥が主要な材料であった。ナジュド以外のサウディアラビア各地にも特色のある建築様式があったが、石油ブーム以後は各地で一様に近代的ビルが増えた。またサウディアラビアの近年のモスクは、他国のムスリムにはサウディアラビアを連想させるシンプルな建築であるが、サウディアラビアのムスリムが、それらのモスクを「イスラーム的」と認識しているのか、「サウディアラビア的」と認識しているかは、定かではない。近年リカードには、「中東一の高層ビル」ファイサリーヤ・センターが建設された。今後、サウディ人の国民的プライドを高揚するシンボルになるだろうと予測される。

現在既にワッハーブ主義は、ムハンマド・イブン・アブドルワッハーブの教義のように厳しく実践されているわけではなく、国民創出のための文化的装置として今後増加していくことも考えられるが、現在までは、大きく制約されてきたと言えるだろう。

(3) 政治的動員力の弱さ

サウディアラビアの政治的動員力の弱さは、サウディアラビア・アイデンティティの脆弱さの要因となっている。それらを列挙すると以下のものが考えられる。

その第一の原因は、「実質的な市民」の育成を制限する政治制度・思想・文化に求められる。報道や学問の自由は存在していない。徴税も、徴兵も、政治集会も、選挙制度もない。サウディアラビアは、明確なナショナリズム運動の経験もない。これらの全ての欠如が、サウディ人の積極的な国民としての活動を不在としている。第二の原因は、市民を動員しなくても、十分な資源を有し、分配することに重点をおくレント国家としての特性に求められる。

現在増加している「石油ブーム以後の世代」は、政治的に保守的である。この「石油ブーム以後の世代」は、貧困の時代や地方生活を知らず、高い就学率による、「イスラーム、そして王と祖国」の教育を受けた世代である。一方で現在では、この世代は、失業やグローバル化などの社会不安に直面している。もっとも多数を占める若者像をとりあ

げるなら、彼は、ムスリム・アイデンティティを第一に重要であると考えている。湾岸戦争やその後のファハド国王の疾病や国内でのテロ事件などに直面したため、一昔前ほどの政治的無関心は消えつつあり、社会改革の必要性や祖国愛には目覚め始めているが、それでも政治的には保守的なままである。彼ら若者は、今一つ完全には信奉しきれないが、排除することもできないサウード家が「祖国」に君臨している事実を受けとめ、イスラームの価値を基盤とした社会の実現を望んでいる、といえるだろう。

サウディアラビアには、このような新しいタイプの若者の意見を吸い上げ、活力を与えるチャンネルが十分に存在しているのだろうか。

6．結論と今後の展望

部族アイデンティティは、社会的紐帯の一つとして強固であり続けてはいるのだが、その役割には変化が進行中であり、「アラブ」、「祖国」、「ムスリム」に上位の座を譲ることになった。ワッハーブ主義・サウード家の複合支配は、部族アイデンティティの代替として、「イスラーム的伝統の創造」を推し進め、「イスラーム、そして王と祖国」という複合アイデンティティの覚醒を推し進めている。サウディアラビア・アイデンティティ形成の中核は、国家機構と密接に結びつく、サウード家、ウラマー、大商人、高級官僚という支配階層である。

サウディアラビアにおけるムスリム・アイデンティティは、ワッハーブ主義固有の歴史や、世界の中で特殊な政治的役割を担っているサウディ政府（サウード家）と切り離しては語られることができない状況である。これを「ムスリム・アイデンティティ」と分類するか、あるいは「サウディアラビア国民形成」の途上と位置づけるのかは、国民に関する定義の強調点をどこにおくかという定義の問題に関わる。

サウディアラビアの人々には、「われわれはアラブ」、あるいは「われわれはムスリム」、あるいは「同じ祖国（ワタン）を共有する者」としてであるにせよ、「われわれ意識」が、着実に育ちつつある過程にある。このように「われわれ意識」が育っている点に着目すれば、サウディアラビアでは、「国民」が形成途上であるといえるだろう。しかし、この「われわれ意識」が、ムスリムとしてのアイデンティティを第一の価値規範とするのみで、「積極的な国民」となっていないことに着目すれば、サウディ人を「国民」とは呼びにくい。

「イスラーム、そして王と祖国」という複合アイデンティティのバランスが揺らぎ始めたのは、湾岸戦争が大きなきっかけであった。今後は、サウディアラビア・アイデン

ティティを強固にすることを妨げている、動員力が極めて脆弱な、ワッハーブ主義・サウード王制・レント国家という条件の中で、いかに国家の舵取りが可能となっていくのが課題である。サウディ政府の対応策は、同政府の常套手段となっているが、「体制の安定性を保持するために最適を考えられる速度で変革を促す」という手法となるだろう。

今後サウディアラビア国民のアイデンティティが順調に成長するためには、国家機構が統治能力を絶え間なく向上させることが最低限の条件であるが、それは言い換えれば、ワッハーブ主義、サウード家支配、レント国家という組み合わせが、サウディアラビア青年たちにとって魅力ある体制として存続しえるのか、という問題でもあろう。この条件を達成できるならば、サウード家という支配者への忠誠心は極めて政治的に調達されているとしても、サウディアラビアの国民の間の「われわれ意識」が次第に強化されていく可能性を否定することはできないと考えられる。

文献リスト

Abir, M., 1987. "The Consolidation of the Ruling Class and the New Elites in Saudi Arabia," *Middle Eastern Studies*, vol.23, no.2, pp.150-171.

Abir, M., 1988. *Saudi Arabia in the Oil Era: Regime and Elites; Conflict and Collaboration*, London, Croom Helm.

Altorki, Saraya and Cole, D., 1989, *Arabian Oasis City; the Transformation of Unayzah*, Austin, University of Texas Press.

Atar, Mohammad A., 1988. *Quest for Identity: the Role of the Textbook in Forming Saudi Arabian Identity*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Oregon.

Baştuğ, Sharon, 1998. "The Segmentary Lineage System: A Reappraisal," *Changing Nomads in a Changing World*, Giant, Joseph & Khazanov, Anatoly. M.ed., Brighton, Sussex Academic Press.

Beblawi, Hazem, & Luciani, Giacomo, 1985. *The Rentier State*, New York, Croom Helm.

Cole, Donald P., 1975, *Nomads of Nomads, The Ā Murrah Bedouins of the Empty Quarter*, Chicago, Aldine Publishing Company (1985 『遊牧の民ベドウィン』片倉もとこ訳).

, 1982. "Tribal and Non-Tribal Structures among the Bedouin of Saudi Arabia," *Al-*

Abhath 30, p.77-93.

Dresch, P., 1986. "The significance of the course events take in segmentary systems." *American Ethnologist* 13: 309-24.

Dūsri, 'Abd al-Raḥman b. 'Alī al-, 1994. *Awwaliyāt Sa'ūdiyyah*, Al-Riyāḍ, Dār al-Nadan al-Dawli.

El-Farra, 1973. *The Effects of Detribalizing the Bedouin on the Internal Cohesion on the Emerging State*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Pittsburgh.

El-Erris, Tarik Sultan, 1965. *Saudi Arabia: A Study in Nation Building*, Unpublished Ph.D. dissertation, The American Univesity.

Fabietti, Ugo, 1982. "Sedentarization as a Means of Detribalization: Some Policies of the Saudi Arabian Government Towards the Nomads," In Niblock, Tim, ed., 1981. *State, Society and Economy in Saudi Arabia*, London, Croom Helm.

Faheem, Mohammed Eisa, 1982. *Higher Education and Nation Building: a Case Study of King Abdulaziz Universty*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Illinois.

福田安志, 1992. 「アラビアにおける部族社会と国家統合：サウジ・クウェートなどでの民主化問題の底流を探る」『現代中東研究』11号, 1992年8号.

, 2000. 「サウディアラビアにおけるザカートの徴収：イスラームの税制と国家財政」『イスラム世界』, 55号, 2000年9月.

Gabbani, Mohammed Abdelaziz al-, 1984. *Community Structure, Residential Satisfaction and Preferences in a Rapidly Changing Urban Environment: The Case of Riyadh, Saudi Arabia*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Mishigan.

Hadda, Mohmma al-, 1981. *The Effect of Detribalization and Sedentarizat on the Socioeconomic Structure of the Tribes of the Arabian Peninsula: Ajman Tribe as a Case Study*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Kansas.

Hajrah, Hassan Hamza, 1982. *Public Land Distribution in Saudi Arabia*, London, Longman.

Ḥamūḍ, Sa'īd b. 'Abd al-Lazīrī Alī b., 1993. *Duwar al-'Umda fī Ḥidmat al-Mujtama' al-Maḥḥalī*, Risālat Mājstīr lil-Markaz al-'Ilmī lil-Dirāsāt al-'Amniyah wal-Tadrib, al-Riyāḍ.

Halliday, F., 1974. *Arabia without Sultans*, Vintage Books, New York. (=1982. 岩永博訳『現代アラビア：石油王国とその周辺』法政大学出版局)

Hudson, M.C., 1977. *Arab Politics: the Search for Legitimacy*, London, Yale University Press.

Helms 1981. *The Cohesion of Saudi Arabia: the Evolution of Political Identity*, London, Croom Helm.

Katakura, Motoko. 1977. *Bedouin Village, A Study of Saudi Arabian People in Transition*, Tokyo, Tokyo University Press.

片倉もとこ, 1986. 「族認識から見た家族」『講座イスラム4・価値と象徴』板垣雄三編、岩波書店.

川田順造、福井勝義, 1988. 『民族とは何か』岩波書店.

Keesing, R.M., 1982. 『親族集団と社会構造』小川・笠原・河合訳, 未来社 (=1975, *Kin Groups and Social Structure*, New York, Holt).

Khazanov, A.N., 1983. *Nomads and the Outside World*, Wisconsin, The University of Wisconsin Press.

Khory, P.S., & Kostiner, J., 1991. *Tribes and State Formation in the Middle East*, London, I.B.Tauris.

Kostiner, Joseph, 1991. "Transforming Dualities: Tribe and State Formation in Saudi Arabia," In Khoury, P. S., and Kostiner, J., .ed. *Tribes and State Formatin in the Middle East*, pp.226-251.

Krimly, Rayed Khalid, 1993. *The Political -Economy of Rentier States: A Case Study of Saudi Arabia in the Oil Era, 1950-90*. Unpublished Ph.D. dissertation, George Washington University.

Lackner, Helen, 1978. *A House Built on Sand*. (=1981. 岸田聰訳『砂の王国サウジアラビア』, ダイアモンド社)

Lancaster, W., 1981. *The Rwala Bedouin Today*, Cambridge, University Press Cambridge.

Malik, Saleh Abdullah, 1973. *Rural Migration and Urban Growth in Riyadh, Saudi Arabia*, Unpublished Ph.D. dissertation, Univ. of Michigan.

Mushakhkhaş, Muḥammad ‘ Abd al-Ḥamid. 1995. *Jugrafīyāh Bashariyah al-Mamlakah al-‘ Arabīyah al-Sa‘ūdīyah*, Jiddah, Dār Zahrān.

中村覚, 1999, 「反米のシンボルとしての『テロリスト』の行方：ウサーマ・ビン・ラーディンは『ジハードの英雄』か『テロリスト』か」『現代の中東』26号, 1999年3月.

中田考, 1994. 「宣教国家サウディアラビアのイスラーム対外支援」『中東研究』395号., 1996. 「サウディアラビアとワッハーブ派の経済観念」『GCC諸国の石油と経済開発』福田安志編, アジア経済研究所.

Nasari, Hani Yahya, 1979. *Ibn Abd al-Wahhab's Philosophy of Society: an Alternative to the Tribal Mentality*, Unpublished Ph.D. dissertation, Fordham University.

Nasser, Saleh Ahmed, 1976. *The Importance of Community Development in the Development Program of the South West Region of Saudi Arabia*, Unpublished Ph.D. dissertation, Michigan State University.

Niblock, Tim, 1981. "Social Structure and the Development of the Saudi Arabian Political System," In Niblock, Tim ed., *State, Society and Economy in Saudi Arabia*, London, Croom Helm.

Oleander Press, 1986 (1917), *Arabian Personalities of the Early Twentieth Century*, Cambridge.

Piscatori, J.S., 1981. *Ethnic Identities in a Traditional World*, Stack, J.F., ed., Greenwood Press. (=1985. 浦野起央監訳「サウジ・アイデンティティの形成」『エスニシティと国際政治学』, 時潮社)

Rashīd, Muḥammad b. Aḥmad al-, 1996. *Tā alīm-nā Ilā Ayna?*, Al-Riyāḍ, Maktabat al-'Ubaykān.

Said, Abdulrahman H., 1979. *The Transition from a Tribal Society to a Nation-State*, Unpublished Ph.D. dissertation, Columbia, University of Missouri.

Salem, Faisal S.A. al-, 1987, "The Issue of Identity in Selected Arab Gulf States," In Faran & Kuroda, 1987. *Political Socialization in the Arab States in the Middle East*, Boulder, Lynne Rienner, pp.47-63.

Sefran, Ali Mashhor al-, *The Essence of Tribal Leaders' Participation Responsibilities and Decisions in Some Local Government Activities in Saudi Arabia: A Case Study of the Ghamid and Zahrah Tribes*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Kansas.

Shaker, Fatima Amin, 1972. *Modernization of the Developing Nations: the Case of Saudi Arabia*, Unpublished Ph.D. dissertation, Purdue University.

Shalbī, Tharwat Muḥammad, 1988. ' *Ā'id al-Bitrūl wal-Taghīrāt al-Musāḥabat la-hu fī al-Mujtama' al-Sa'ūdī*, Jiddah, Dār al-Mujtama' al-'Ilmī.

Sharideh, Khalid A. al-, 1999. *Modernization and Sociocultural Transformation in Saudi Arabia: an Evaluation*, Unpublished Ph.D. dissertation, Kansas State University.

Shuwayl, 'Alī b. Sālim, 1990. *Fā'ilīyat al-Ṣalaḥ al-Qabalī fī Jarā'im al-Qiṣāṣ wal-Diyah: Dirāsah Taḥqīqīyah 'alā Mintaqat Bāḥah*, Risālat Mājtūr lil-Markaz al-'Ilmī lil-Dirāsāt al-

‘ Amnīyah wal-Tadrib, al-Riyād.

Smith, Anthony D., 1985. *The Ethnic Origins of Nation* (=1999. 巢山靖司、高城和義訳『ネーションとエスニシティ：歴史社会学的考察』, 名大出版).

Sultan, Ali Ahmed al-, 1988. *Class Structure in Saudi Arabia*, Unpublished Ph.D. dissertation, Michigan State University, 1988.

Takabayashi, Yukihiro, 1986. *Toward a Modern Islamic Kingdom: a Sociopolitical Analysis of Contemporary Saudi Arabia*, International University of Japan.

Tbeileh, Faisal Hasan, 1991. *The Political Economy of Legitimacy in Rentier States: a Comparative Study of Saudi Arabia and Lybya*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of California.

富塚俊夫, 1993. 「ナショナルアイデンティティーとしての部族意識」『国家・部族・アイデンティティー』酒井啓子編, アジア経済研究所.

Toufik, Suliman Ibrahim, 1985. *The Emergence of a National Identity in Saudi Arabia*, Unpublished Ph.D. dissertation, University of Idaho.

Woodward, P.N., 1988. *Oil and Labor in the Middle East : Saudi Arabia and the Oil Boom*, New York, Praeger.

Yamani, Hani A.Z., 1998. *To Be a Saudi*,. London, Janus Publishing Co..

Yamani, Mai, 2000. *Changed Identities: Challenge of New Generation*, London, Royal Institute of International Affairs.